
RAN&JUMP

月明かり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAN&JUMP

【ノード】

N8545C

【作者名】

月明かり

【あらすじ】

夏休み最終日からいたつて普通(?)の高校一年生の拓也は……
忙しくなってしまった

第一話（前書き）

小説初作品です（ ）楽しんじただければ嬉しいです（ ^ - ^ ）

第1話

高校生活初の夏休み
今日が最終日である

俺、椎名拓也は今病院から帰ってきたのだが……

只今の時刻…午後5時

俺は自宅のドア付近にいる

引っ越し屋さん……

なぜ我が家に荷物を運んでいるのですか！？

なぜに？

way? (あつてるかな?)

しばらく呆然として作業している人たちを見てみると……

「あらーおかえり」

母の椎名佐知子が俺に気づいた

「ただいま……あの荷物共は何ぞ？」

当然の質問でしょ？

だって引っ越しの荷物が家に運ばれてるんだから

「ああ～……アレはね」いや！

何その悪魔みたいな笑み！？

特に目がヤバいって！！

「明日から家に住むことになった人の荷物よ」

……はい？

一瞬でフリー——ズ

「聞いてるの？」

強制解凍

「き、聞いてますともーって何で今頃言つーー？」

「母さんも今わつと父さんに聞いたばかりなの」

あのクソ親父が！――！

とつあえず氣になつたことを質問するか

「で？誰が一緒に住むのさ？」

なんで考える？

忘れたのか？

あ…思い出したみたい

「教えない」

クソ婆っ！

なにが だ

なんて言つたらこの世から俺の存在がなくなるな……

教えてくれないのならば……

「親父に聞くのみ！」

俺はリビングに居るであらう親父のもとに急ぎ足で向かった

『ひとまず質問して殴ろ』
なんて考え方がら

母さんすれ違つ時に一ヤつと不適な笑みを浮かべていた」と云つ
かずに……

第2話

親父よ

何があつたんだ？

リビングに入るとそこには……白田で鼻と口から赤いモノだしてい
る我が親父、椎名光輝しいなみつひが氣絶していた……

一瞬死んでいるのかと思ったぜい（汗）
と・に・か・く起こすか？

台所で水を「ツプに入れ親父の顔に落とす……起きないですねえ」
試しに男の急所を蹴つてみるか？
力を多少抜いて……

『ボフ』……起きない

『ドサ――』

「と何かを落とす音が後ろから……
つておい――引っ越し屋さん……アンタが反応してどうするアルか？
しかも『痛い』と言つてるような顔してるし（汗）
そして親父よ……なぜ今の荷物が落ちた音で起きるアルか？ 謎だ
……」

「拓也 私は何をしていたのだ？」
俺は一度溜め息をして

「気絶だけど……なんで気絶してたのさ？」
と答える同時に質問をすると親父は

「ちょっと母さんに明日家に来る人のこと話したら

足が震えてる

「『話しするの遅いんじゃないんですか？』って言われて……

泣きそうな顔するなよ……

「殴られて気絶した……と？」

「違う！質問にすべて答えた後に殴られて氣絶したんだ！」

順序なんてどうでもいいですよ？

「あのさあ～明日から家に他人が一緒に住むつて言つのは遅すぎだと俺も思つ。あとなぜその人は家に来るのさ？」

「その子の両親に頼まれたんだよ。なんでも1年間海外に仕事で親2人共家を空けるらしい。それで預かってくれつて」

「なるほど……」

「今の会話でわかつたことは家に来るのは大人ではなく子供である」とぐらいだな

「でもその子は嫌がつてないのか？」

嫌々で家に来てもうつと正直色々と面倒だ

「それなら心配はないぞ？嫌がるビtocicaむしろ喜んでいた」 そうか……ん？

「……なんで喜ぶんだ？」

赤の他人の家に行くのに嫌がらないとしても普通は喜びはしないな
いだろ？！

「それは…ひ・み・つ」

やべえ～殴りてえ……まあここには落ち着こづ
「じゃ～質問を変えよつ。どんな子が来るんだ?」

親父は「うん…」と声を出した後すぐに『閉いた』と言つ顔を
して

「ひ・み・つ」
などと言つやがつた

「眠るがいいいいー」

と叫びながら俺は親父の顔にマジで必殺右ストレートを決める親父は
「ふべ！」
と言つなり氣絶しやがつた

第3話

結局あの後親父は1時間ほどで田を覚まし（実は母さんに叩き起された）母さんと2人で経営する店に行つた
俺はいつものようにテレビを見たりしていたが明日に備えて早めに寝たのだった

そして今、朝起きて学校に向かっている

「タク～～！」

後ろから俺の名を呼びながら走つてくる奴の名前は真田健太

俺の親友＆幼馴染み

運動神経抜群で頭も良く女子に人気がある

ちなみに父親は真田病院の委員長で俺の担当医であつたりもある

「ケンおはよ～」

「膝は？」

「バツチグ～」

「それは良かった

この後2人の会話は自然と夏休みの出来事変わり学校まで話は続いた

1 Cが俺のクラスだ（あとケンも）

席は窓側の端の列の後ろから2番目だ
ちなみに後ろはケンだ

「おっはよ～健太！あと拓也」「
俺はついでかよ！？」

笑顔で挨拶してきたのは俺の隣の席である内村瞳
髪は茶髪で少し長め
顔は可愛いと言つより綺麗の方があつている

「おはよう瞳」「
笑顔で返事をするケン

「うーす」「

適当に返す俺

「ねえねえ今日どうする？」「僕はいいけど……タクは映画ビリ
する？」「

「…………行く

「拓也～今のはなによ？」「

君たちのイチャイチャしている横で映画を見るか見ないか悩んだで
すよ

気がつくといつの間にか隣にいた瞳はケンの隣に座つてゐるし

神業だな……

このクラスは男子が20人で女子19人であるためケンの隣は誰も

いないが休み時間は大体今のように瞳がケンの隣に座っている

そして俺が後ろを向いて3人で会話をする

第4話（前書き）

予定よりはるかに長くなつたやういました

第4話

チャイムがなり担任が入ってきたが依然俺たち3人は（俺後ろ向いてます）映画の話を続けている

担任はなにやら話しているが……

クラスの半分以上の生徒は聞いていないな

「……で今日このクラスに転入してくる子がいます」

転入生ねえ……

「転入生だつてよ」

「俺興味なし」

「僕も興味ないかな」

「2人してツマんない」

悪かつたですねツマんなくて

「さあ～入つてきて」

担任が手招きするとドアが開き転入生が入つてきた瞬間……

男子共がなにやら

「可愛い」

だのなんだの言い騒ぎだした

後ろを向いていても現状から女の子だとわかつた

「IJのクラスの男子って単純だよね」

瞳の言葉に苦笑しているとケンが転入生を見て驚いた顔になつた

「どうした? ケン?」

俺の声でハツと何かを思い出した顔になつたケンが不意に

「2年前の薰との約束……アレを教室でしたらヤバいよね?」

と真顔で言つてきた

瞳は何話しか分からず首を傾けているが俺は真顔のケンに対して真顔で

「当たり前だろ?」

と答える

しかし何で今薰との約束の話が?.

「……靴ひもは……つん……せりふと詰んでるわ」

「おこケンンビ'」

「初めまして。今日はこのクラスに転入する」とになりました堂本薰じょうほんくわいです

「へ？」

「薰？」

「堂本薰！？」

俺は驚いて前を振り向く

そして転入生の姿を見て自分の知っている薰だと分かり、さらりと驚おどろか、思わず

『ガタツ！』

と音と共に立ち上がりてしまった

「椎名だいじしたんだ？」

担任の言葉など耳に入つてもいいない

あ……薰と曰があつた

ヤバい……薰の顔がメチャクチャ笑顔になつていく

「……っータク！」

ケンに呼ばれたときのなぜ薰との約束の話を急にしたのかを理解で
きた瞬間

「タ……タクちやーーん！ーーー！」

薰が俺めがけて走ってきた

ヤツツツバ～～～い！！

ここで薫との約束を果たすと俺の寿命が.....高確率で縮む！

又は魂消滅！！！

そんなことあつてたまるか～～～！

死にたくないその一心で俺は窓から外に出て走つて～～～～～！

逃げた（泣）

が！

薫は諦めず窓から出てきて 「タクちゃん待つてよお～～」 などとホザきながら追いかけくる

『ヤバいロックされている！？』

「ゴメンね瞳。ちょっと僕も行つてくるよ～～～」

「え？ちょっと健太？？」

健太も窓から出て走つて2人を追つかけて行つた

3人が出て行つた教室は静まりかえつていた

第5話

現在…逃げる」ことをやめ体育館裏にいる
そして俺の目には大泣きしている薰とそれを宥めるケンの姿が映つ
ている

「タクちゃんが約束やぶったあー！」

「俺が悪かったから泣きやんでくれ……頼むから

結局薰が泣き止むのに32分52秒かかった

もしケンがこの場にいなければかなり時間がかかったんだろう…
…ありがとなケン

「……落ち着いた？」

「うんー！」

元気100%ですね

「とおーーー！」

「ゲフッ…」

座っている俺の腹に薰のタックルが見事に決まった

痛いってレベルじゃないら……

體吐しそうなレベルだぜ

「約束まもってよね」

「…………わかったよ」

その上田遭にはレッデカードです

いまだ俺に抱きつこうとする薰の背中に両腕をまわす

…………今抱き合つてますが何か問題でも？

これが2人でした約束だから仕方ないのですよ

なぜこんな恥ずかしい約束をしたのかって？

それは後ほど……

「じゃ～僕誰も来なよつに見張つてるね」

ケンは背中を「ひりに」向け離れたところに移動した

「わざは逃げて悪かったな…教室ではこれ…できないんだ」

男子共に殺されるから

「わざは…タクちゃんが今約束守ってくれていいから」

「やつか…」

「うん……」

あらためて薰を見てみると可愛くなつたと思つた

もしかして昔から可愛かつたのか？

抱き合つてゐる状態で10分が経過した

「もういいだろ？」

「あと……少しだけ」

20分経過…

「流石に」もつ…

「まあーだ

30分経過…

「おー…離れるー」

「やだー！」

無理矢理離そくにもビクともしない…

クソツ！

こうなつたらケンに助けを……ケン？

何処に……いるんだ？

ケン？

ケンよ 貴様

逃げたな？！

俺は10分後薫引き剥がし2人で教室に戻った

男子（ケン以外）が殺意のこもった目で俺を……つて女子よ……何で
今にも泣きそうな顔で俺を見ているのですか？？

「ああ～君たち2人と真田はホームルーム終了後職員室に来るよう
に」

ですよね~
.....

第6話

担任にメチャクチャ注意されました（泣）

職員室を出ると瞳がもの凄い形相で俺らを待っていた

「うつせりへりのよ?後で説明しなさいよ（怒）

怖い……

「どこか映画見に行いつ

「さうだな

……ん?

薰が目を輝かせながら俺を見てる……

まさか

『私も行きたい』

なあ～んて言わないよね?

「私も行くーー!」

ビーン、ビーン、ビーン?

「どうする瞳？」

「私はいいわよ？堂本さんと仲良くなりたいから」

「じゃ～決まりだね」

おい「コラセニ」のカッフル勝手に決めるな！！

横にいる薰は、なぜか疑問の表情になっている…

どうした？

「ケンちゃん」

「なに？」

「この人誰？」

ああ～なるほどね

「僕の彼女だよ」

「ええ～？」

薰驚きすぎだ……

それでケンに失礼だぞ

「私は内村瞳。瞳って呼んでね」

「うん じゃ～私のことも薰つて呼んでね」

「うん。よろしくね薰ー。」

「豈おへてひよかにひがい」

あのさ……自己紹介はそこまでにして映画見に行かないか?」

「イニツサーヴィス 謙たお前ら?」

「ひつぐ……ぐすん」

まだ泣いてるよ.....

今映画を見終わって家に向かっているのですが……

「ここまで泣いてるんだ？」

「だつてジョンがあ～～」ジョンとは今し方見た映画の主人公で簡潔に言えば恋人をカバつて死んだのだ……

それを悲しむのは大いに結構だがいい加減泣きやんでもしい……

先ほどからすれ違う人々に痛い目で見られているんですよ？

俺だけが！！

しかも

「あんな可愛い娘泣かして」

「彼女可哀想……」

などが耳に入つてきた

俺が泣きそうですよ……

どうじつしているうちに家に着いた

「ただいま」

なぜお前が言つ？

「おかえり薰ちゃん」

母たと何普通に答えてるの？

「拓也なにしてるの？早く上がりなさい」

薰に付いて行くよう「リビングに入った

「叔父さん久しぶりです」

「久しぶりだね薰ちゃん」

などと話をしている

急に薰が俺の方に振り向きワザト「りく

「コホン…」

と咳き込む

「……なんだ？」

嫌な予感が

薰は眩しいくらいの笑顔で

「今日から椎名家にお世話をになります堂本薰です。よろしくお願いします」

ナンダッテ？

「はははー、ビックリしただい？」

このクソ親父！

「もう一度眠れやああ～～！～～！」

「……で？ 薫は何で黙つてたんだ？」

ちなみに俺の足下には氣絶中の親父がいる

「だつて叔父さんが『拓也には内緒でお願いね』って

じゃねえ！

「あつたく……ああ～とにかく誰にでもいいとこでもいいよ?OK?」

「ええ！？」

「わかつたな？」

「はあ
い…」

顔が納得していな

「はあ～……腹減ったな……母さんメシまだ?…」

「はいはい」

ゆれこ……

親父 践んでるよ？
まあ～いいか？

メシを食べ終わり、風呂に入った後に薰と話で盛り上がった
「ここ時間だな寝るべ？」やつとお互い部屋に床にした

薰の部屋は俺の部屋の隣にある
「おやすみタクちゃん」

「ああ～おやすみ」

やつとお互い部屋に入った

と寝る間際まだ少しおわづらはれなかつた
が！

『明日も何か起きやうだな』

と寝る間際まだ少しおわづらはれなかつた

第7話（前書き）

健太からの田線です

「おはよっ」「おはよっ」僕、真田健太は前を歩いている2人に声をかける

「おひす」「おはよっケンちゃん!」

前者はタクで後者は薫の返事である

薫が引っ越しをするまでは毎日3人で通学していた

だから今3人で歩く」と冗談を感じる

……あれ? 急に2人でヒンヒンと話を始めちゃった
あ……終わったみたい

「ケン今これから言つことは他言無用で頼む」

「隊長殿! 何でありますか?」

「実は薫は今家庭の事情で俺の家に住んでいる」

「……それは誰にも言えないね。 いつたらタクが三途の川渡ることになるからね」

「ねえねえ三途の川ってなあに?」

相変わらずだね薫は(笑)

「三途の川ってこつのはね…………」

いつも笑顔だけど、よく僕らを困らせる薫

そんな薫が居るからかな?呆れた顔をしているけど、いつもよりタクは楽しそうだ

会話はぐく普通だったけれど僕も今朝はなぜか楽しく感じられた

教室に3人で入るとなぜかザワつき始めた

たぶんタクと薫が一緒に学校に来たからであろう

タクは顔がいい+高身長で誰にでも優しい

そのため女子によくモテるがかなりの钝感だ

薫の顔は可愛らしくて、身長は普通の女子ほどだ

いつもタクと同じく钝感だ

ちょっと話が逸れちゃったな…………とにかく今は昨日の事で『椎名拓也と堂本薫は親しい仲だ』と噂になっていたから、たぶん其れだ

現にタクは男子に殺意のこもった目で、また女子に泣きそつた目で見られている

一方で薰は女子数名に睨まれている

まあ鈍感な2人は

「何でみんなこいつを見ているの? てるのかな?」

「俺を見ている男子共はわかるが女子は何でかは分からん」

なんてこと言つてるよ

まあ仕方ないかな?

「タクちゃん帰ろ」「薰が俺に、俺が薰に話しかけるたびに皆をさわづかないと下さらない?」

「はいよ……あ!」

「忘れてた

「なに…どうしたの?」

「今日は病院行かなきゃならん。よつて一緒に帰れない

「付いて行っちゃダメ?」

「キター!! その上田遣い反則だつて……

「行つてもツマらないぞ? それでも行く?」

「それでも行く!」

「はいはい。じゃあ行くべ」「行くべーー!」

「真似をするな!!」

「ケン、また明日な

「うん! また明日な

「瞳バイバイ！」

「ばいばい」

「最近痛みは？」

只今……真田病院の医院長で、俺の担当の真田剛先生によつて診断
中……ぶつりやけケンの親父

「とくにないです」

「そりゃ！でも無理してはいけないよ、あと強い衝撃を『えらいこ
と。いいね？』

「はい」

また無理してあんな思いするのは、アメンだ

「では今日はこれまで。次は2ヶ月後に来てね

「あつがとうございました」

おこ……薰よ

たつた5分の診断の間で寝るな

現在俺の田の前にイスに座つて口を開けて寝ている薰が居る
まつたく…「イシは

「おじ…薰…起きる…」

「ふにゃ…タクちゃん終わったの…？」

「ねー…起きる…」

「はあ…」 わたままで（5分間のみ）寝てたのに元気な奴やな

「膝じつだつたの？」

「特に異常なし。ただ無理しないこと。また強い衝撃を引えないことだよ」

「わ…無理しちゃダメだよ…」

「へえ…」

「分かれば宜しい。」

「調子に乗るな…」

薰の頭を軽く叩く

すると薰は頭を押さえながら

「 もう…」

なんて言つて頬を膨らます

その一つ一つの動作が可愛く見えて…… つてなに考えてんの俺?
?!

「 タクちやん…どうかしたの?..」

「 え? ななんでもないぞ?」
「 ヤバい冷静になるんだ俺! ! !

「 ほんと?」

そんな疑いの眼を向けるな
わざと動搖しちまつじやねえか!

「 ほ、ほんと?ほんと。わざと帰るわ

案の定… 声が裏がえった

恥ずかしさのあまり歩く速度を上げた

「 待つてよお~!」

この後は普通の…… ほんとに普通の話をしながら帰った

でも他の人と話しているより、薰と話をしている方が楽しい

何でかは解らない

いや本当は解っているのかも知れない

私こと堂本薰は転入して2週間がたちました
いまさつき学校は終わつたんだけど……

「あ～……今田は用事があるから先に帰つてくれ」

「え！？……あ！わかつた」

私は心の中で『またなの？』と呟いた

「悪いな」

タクちゃんは顔の前で手を合わせながら謝つてきた

「タク……用事があるなら早く行かなきやマズいんじやないの？」

「お、おついじやへなケン」タクちゃんは走つて教室を出て行つた
「拓也」つてさあ～……週に2回程『用事がある』つて言つては走つ
て帰るわよね？」

「うん……瞳は用事が何か知らないの？」

「用事つてなんだろう？」

「家に帰つてきてから聞いてみても別の話をして誤魔化されたりやう
んだよね……」

「うん……瞳は用事が何か知らないの？」

瞳は首を傾けて

「バイトじゃないのよね?」と聞いてきた

「それはナイと思つ……タクちゃん叔父さんが経営している居酒屋で
しかバイトしないみたいだから」

「なんの話しつ?」

ケンちゃん再登場

「ケンちゃんにはタクちゃんが何の用事で帰つてるか知ら

「ボクハ何モ知リマセンヨ?」

答えるの早くなかった!?

しかもなんで片言&敬語なの?あ…………瞳が…………瞳がケンちゃんを

睨んでるよ

正直……瞳が怖いよ

「健太なにか知つてるわね?」ケンちゃん笑顔だけどスゴイ汗かい
てる

「し、知らなによ…………あ!僕も用事があるから帰るね」

と言つなりダッシュで教室から逃げてつた……

「……逃げられた」

私もあんな瞳に睨まれたら逃げちゃうと思つ

「ケンちゃんは知ってるのかな?」

「たぶん知ってるだろ？ けど…… 健太のことだから 100% 言わないとしようね」

「そ、うだね」

ケンちゃんは人の秘密を絶対言わない
それは昔からそうだつた

「ああ～気になる！～」

瞳はそう叫んですぐに『ハツ！』とした顔になつた

「薰……もしかして拓也の用事つて彼女とデートかもよ?」

「え？！」

タクちゃんに彼女が！？
用事つてデートのことなの！？

「か、薰？？」

「 そ う な の ！ ？ デ ー ト な の ？ ！ タ ク ち ゃ ん に 彼 女 い る の ！ ？ ね え 瞳

11

「落ち着きなせ——へ、枯れ——」

ハツ？！私としたことが……興奮のあまり瞳の首を絞めちゃった

「『メンなさい...』

瞳の首から素早く手を離す

「苦しかった~」.....」

「いのんなさい」

再度謝る

「まあ~許して上げるわ。それに拓也に彼女がこもって話しあは今まで一度たりとも聞いたことないから安心して」

「やうなのー~..」

安堵の溜息をつく

「はあ.....よかつた」

「よかつた? そんなに拓也が好きなの?」

「ふえ?~..」 「あんなに騒がれれば誰でも判るわよ~..」

「あ~」

顔が.....熱いよ

「仕方ない。今度後つかるわよ」

.....えー?~..

「ダメだよー~..もしタクちゃん見つかって怒られちゃうよ~..」

「大丈夫だつて 拓也が好きなんでしょう? 『』にならなーの?~..」

「それば……氣なるべ」

「じゃ～決まり」

何かとんでもないことにになつちやつたよ

……

ひむじむ

「腕がなるわ」

いの日が

「ええへと…………あつたあつた はいサングラス…………つて薰？」

来ちゃつたよ（泣）

薰！」

ひい！？

「もうここにかりしなさい！」

たたしまタケちゃんを尾行中

「…ね…おめでた…」

.....
o

無言の殺意が…

「うるさい」

— それではサンケテスつけて………… レッテル —

なんで瞳はそんなに楽しそうなの？

私は心中で神様に祈つた

「神なんて存在しないわよ？」

サラリと存在否定？！

つてたひきのせ心の声だよ！？？

瞳が怖い

「エリに向かって歩いてるのかじりっ..」

「歩いて15分はたつたね」

本当にエリに向かってるんだろ?..

「薰はここに止めたのか?..」

「ななな?..」

「声が大き..」

「あわわわ..」

あ.....タクちゃんが止まつた

ポケットから鏡をだして髪をセッテし直していく

「これは絶対に女と会つわね」

「そんな

イヤだよ

「もお～せり気合を入れる」

瞳が背中をたたく

「…………はい」

無理だよ

タクちゃんに彼女が居るなんて

私耐えられないよ……

ヤバい泣き声

あー…………タクちゃんが角を曲がった

「見失うとこけないわー！急げわよ」

「うんー」

《ドン》

角を曲がつたといひで誰かとブンカつた

早く謝りなくひや

「すいまああああ？ー」

「…………マズいわね」

私がブツカつたのはタクちゃんだつた

てかなんで瞳はそんなに冷静なの？

あれ？タクちゃんが笑つてゐ

もしかして怒つてないのかな？

「なんで君たちが此処にいるのかな？サングラスなあ～んてつけて
や」『怒』のオーラがでまくつている
間違いなく怒つてゐるよ

もつ逃げ出したいよ…………

第1-1話（前書き）

今日明日あと5話程更新したいと思います

第1-1話

ああ～～～～～神様
どうかお助けを……

「さて何で君たちは此処にいるのかな？」

何か言わなくちゃ……！

「え～と…………た、たまたまだよ！ねえ瞳？」

「尾行してたのよ？何か問題でも？」

ひとみいい？？！

「へえ～尾行ねえ…………何でそんなことをする？」

まだタクちゃんは笑顔だ

でも眉が『ピクッ！』と動いた

「週に何度も用事で急いで帰るから怪しことと思ったからよ。でも安心して。用事って何のことかわかったから」

「へえ～……

「ズバリ彼女とデートでしょ？」

「…………は？」

「だから彼女とデートなんでしょう？」

瞳の言つたことを私が言い直す

するとタクちゃんはいきなり笑いだした

「ハハハハ！ なんだよソレ？ 全然違うぞ？」

「「えー?違つ的一?」

私と瞳の声が完璧にハモつた

「だって拓也あんたさつ き鏡だして髪をセットし直してたじやない
!?」「そ、 そうだよーーー！」

「ああ～アレは……」

———15分程前———

『何か後ろから聞き慣れた声が…………気のせいいか?』

約10分経過

『また聞こえた気が………確かめるか』

俺は歩くのを止めてポケットから鏡をだし、髪をセットし直すフリをして鏡に映し出された後ろの状況を確認する

『アイツ等……つけてきたなーー!』鏡には制服にサングラスといつ

た奇妙な格好をした薰と瞳が映っていた

『とつつかまえてやる……でもここで振り返っても逃げられるしな
く……あの角を曲がって待ち伏せるか……』

「とこうわけ

「何だ……ああ～～もう……拓也の彼女みれると困ったの
だ」

「俺生まれてから16年間1度も彼女つくった」とナイから

「本当なのー? タクちやん?」
「嘘を言つてどうなるよ?」

よかつた

私は心の中でそう呟いた

「じゅ～用事つて何だったの?」

瞳も首を縦に振っている

「はあ～……ついて来ればわかるよ

第1-2話

「エリの？」

「やうだ」

私と薰は拓也の用事がある場所に着いて驚いた

なぜならそこは拓也と健太が通っていた中学校だったから

「たくちゃん……此処にどんな用事があるの？」

私がしようとした質問を薰が先に拓也にする

「バスケ部のコーチ頼まれてんだよ……ほら行くぞ」

拓やはそつ答えて早歩きで体育館に向かった

「ああ～声だしていいやつ……」

「「「「はいー」」」

私たちが着いた時にはすでに練習が始まっていた

拓也が来て嬉しいのかみんな笑顔になつた

「椎名先輩」

そつ拓也を呼びながら部長ひしき子が拓也に近づいてきた

「膝の調子はどうですか？」

「大丈夫だ。完治に近い状態だ」

「本当にですか！？なら今日の紅白戦に出でもらえませんか？最後にどうしても3年全員が椎名先輩とプレーしたがってるんです」

え？ 最後？

「……よしやう！」途端に部員全員が笑顔になつた

拓也ただいま着替え中…………終了

「タクちゃん…無理はダメだよ？」

薰はかなり心配しているようだ

「これくらいなら平氣だ」

「大丈夫よ薰。拓也が倒れたら私がスグに救急車呼んで上げるわよ」

「倒れないって……それより俺の華麗なるプレーをしつかり見てろ

「よ

拓也はやつ血ひトバーー走つていつた

ブザーの合図とともにボールが宙を舞つ……それを拓也がジャンプをし味方の方へ叩く

ボールは見事に味方の手にわたつた

私は今我が目を疑つてゐる
なぜかつて？

それは拓也が次々と敵を抜き去り、ゴールを決めているからだ

「拓也つてあんなに上手かつたの？」

「うん、凄いよねえ。膝を怪我する前はダンクできたらしこよ~。」

……マジで？

薰は拓也が「ゴールを決めるたびに声を上げて喜んでいた

私はあの質問をもう一度することにした

「薰はいつ拓也に喜んでいたつもつ？」

「えー？ いやその……」

薰の顔が真っ赤になつた

「早めにした方がいいわよ、拓也を狙つてる娘なにげ多いから」

試合終了のブザーが鳴り響いた

第1-3話

「 「 「 「 「 今日までありがと「う」わござました」 「 「 「 「

「おひー・じやーな

俺は今校門で後輩たちと別れの言葉を言ひ合つてある

「卒業式見に来るからな」

「 「 「 「 はい」 「 「

別れ際にそう言い走つて待たせている2人のもとに走つた

今3人で帰宅中

んでもつていきなり瞳が

「今日が最後つてど「う」う」と?..」

と言つてきた

「3年生に大会が終わるまでコーチを頼まれてたからな。先週、大

会で負けて今日が3年生最後の練習だったから今日で「一チも最後
だつたつてわけ」

「なるほど……」

納得してもらえたみたい

「タクちゃん膝は大丈夫なの？」

「大丈夫って言つただろう？まあ、心配してくれてありがとよ」

そつ言つて俺は薫の頭を撫でる

「えへへ」

薫は氣持ちよせやつに田をつぶる

「あのさあ、私の前でイチャつかないでくれませんかね？」

「別にイチャついてないだろがー、いきなりなんてこと言いやがる！？」

「そ、そ、うだよ瞳ー！」なんで薫の顔が真っ赤なのはメンドクサ
いのでツッコまない

「薫は本当にわかりやすいわね。顔が真っ赤つかよ？」

「え？ あなかあまい」

何かの呪文か？

それより……

「なにが判りやすいんだ?」

「…………。」

え? なに?

俺なんか悪いこと言った?
なんで2人して睨む?

「この鈍感は……ん? ? メールきてる

ヤバいわね

「瞳? どうしたの?」

よかつた話が逸れた

「健太との約束忘れてたわ……私先に帰るわね……あ……拓也……」

「な、なんだ! ?」

ビックリした

「明日聞いたことがあるからヨロシく」

「聞きたいこと? なんだろ?」

「バイバイ! ! ! 」と叫つなりタクシーに乗る…………つておい……
高校生がタクシーで帰るか普通? ?

「行ひまひつたね

「あ……聞きたいことってなんだろう?」

「わあ～変なことじやなければいいね

「わうだな……まあ～明日になればそれもわかるだろ?それより早く帰らうぜ?」

「うそ

第1-4話（前書き）

タクの回想編

「で？聞きたい」とってなんだ？」

現在昼休み
メシを食べ終わつたため昨日瞳に言われた『聞きたい』と『について質問する

「ああ～簡単よ？拓也の膝が悪い原因と少し遅くなつたけど2学期初日に起きたあの事件についてよ」

「えー？」

幼馴染み3人組が見事にハモる

「もしかして言ひにくかった？」

「やうだね」俺の代わりにケンが答える
『氣まづい空氣』が4人を包み込む

「ああ～いいのよ別に？ちょっと氣になつただけだから」

「気になつたか……………当然だらうな
仕方ない……………

「話してやるよ」

「え？いいの？」

「…………そのかわり誰にも言つなよ?」

「わかつたわ」

「俺は……あの時のことを一瞬で思い出した

「俺は2年前…………とにかくバスケに夢中だった」

――――――――――――――――――――

「拓也飛べ!」

「あいよ」俺は中学生離れしたジャンプ力で見事にダンクショートを決める

「せつすが拓也」

「ナイズショーター!」

チームメイトが俺を次々とほめたたえる

「あつたり前だろ?」

《ズキン》

ん?何だ今の痛みは?

「拓也へ?どうかしたのか?」

「いや何でもねえ

……痛みがひいてる

この時は少し痛みを感じただけだった…………この時だけは

あの変な痛みから1週間がたつた

「タク走らないと遅刻だよ！」

「わかつてる……」

我ながら恥ずかしい」とにケンが家に来るまで寝ていたのだ

「寝坊なんて珍しいね」

「……実は深夜まで勉強を

「勉強とこう名のゲームだろ？」

「バレたか……」

「当たり前」

流石だな親友

『ズキンズキン』

「……………！？」

なんだ！？

メチャクチャ膝が痛い！！

痛みがひかない！！？

「タク？急に止まつてどうしたのぞ？」

「…………悪い忘れ物した。先行つてくれ

「いいよ。待つてるから」

「いいから先に行け！お前まで遅刻するぞ？な？

頼むから先に行つてくれ…………

「わかつた…………じゃ～学校で」
ケンは走つて学校に向かつた

俺は膝の痛みでその場から動けなかつた

あれから一ヶ月

膝の痛みは日に日に酷くなつていた
それでも俺は病院に行かなかつた
やつと手に入れたレギュラー座を誰にも渡したくなかった

そして……………あの日がやつてきた

今日は待ちに待つた新人戦だつた
ケンが試合を見たいというので一緒に行くことにした
俺は時々襲つてくる痛みを誰にも言わずにいた

《ピンポーン》

「母さん行つてくれる

「行つてらっしゃい。あとで応援に行くからね

……………マジかよ

ドアを開けるとケンがいた

「うん」

家の門を開けケンと歩き出した時だつた

ズキン

「痛つてええええ！」

例の膝の痛みが襲ってきた

今までの痛みとは比べものにならないほど痛い
俺は耐えられず膝を手で押さえながらその場に倒れた

「タク？！おい！！」

ケンの声が聞こえた

でもその声もスグに聞こえなくなつた。

第1-5話

「……………ん？」

『気がつくと俺はベッドの上にいた

上半身を起して横に両をせるとケンがいた

「ケン……！」

「ひのけの病院」

「あれ？ なんでだ？」

「試合会場に行こうとして歩き出していくとすぐに倒れると同時に意識をなくした」

あ！ 試合！ ！ ！

時計に目をやる

1時3分

急げばまだ試合に間に合つ

「試合に行かない」と！

立ち上がりうとした瞬間

「いい加減にしろ！ ！」

ケンに怒鳴られた

ケンに怒鳴られたことは今まであまりなかったので俺はビックリし

て固まつた

「……ケン？」

「先生にはさつき電話で行けないとを叔母さんが伝えた。いまから親父にタクが目を覚ましたことを伝えてくる」

ケンは立ち上がった

「スグに看護師が来るだろ？からおとなしくしてなよ」

そういうて病室から出ていった

ケンの言つとおり5分もしないうち看護師さんがやってきた
俺は病室から車椅子で診断室まで運ばれた
診察室の扉の前で親父と母さんに会つた
2人は何か俺に言おうとしてやめた
俺は2人を残し診察室に入つた

「いつ頃から痛みがあつたんだい？」

今日の前にはケンの親父がいる

俺が口を開こうとしたと同時に後ろの扉が開きケンが入ってきた

「僕も聞かせてもらひつよ」

ケンの親父さんは溜息をついた

俺は2人にありのままを話した
話終わるとケンの親父さんが俺の診察の結果を言い出した

「診察の結果……君の膝から鞄帯の部分的断絶が数カ所みつかった」

ケンの顔は無表情になつた

「鞄帯……断絶？」

俺は…………自分の身に何が起きているのかがわから
なかつた

「君の怪我はちゃんと治る。ただ……」

「ただ何ですか？」イヤな予感がする

「ただ君の怪我は酷い状態でね……治るのにかなり時間がかかるん
だ。」

「え？…」

それはどうのこと？

話はそのまま続けられる

「そのため鞄帯もつ中学……いや高校でも…………」

何を言おうとしているのだろうか。やつ思つた
そして次に発せられた言葉に我が耳を疑つた

.....

「バスケはできないんだ」

「またへたま」

一
あ
あ
」

夕ヶが入院して3田がたつた
学校が終つる「毎日う毎舞」

学校が終わると毎日お見舞いに行く

僕はそれに耐えれなかつた

だから

俺が入院て1週間がたつた

『バスケはできないんだ』

ふざけんな！！

なんで俺がバスケをできない！？

「…………」小さな声で吐き捨てたその時だつた

ノックがした

寝ているフリでもしようかと考えたがすぐこのその考えをやめた

「どうぞ」

返事をするとドアが開いた

そこには.....

「あ.....」

「久しぶりだねタクちゃん」

薰が立っていた

「どうして此処に？」

俺は困惑した

「ケンちゃんに話聞いたの。そして頼まれた.....タクちゃん元気な
いから会つて励ましてやつてくれつて」

俺はケンに感謝などしなかつた.....むしろ怒つた

誰にもこんな格好悪い姿を見られたくなかった
その証拠にケン以外の面談を拒否していた

「これお見舞いの花」

「サンキュー.....そこに置いといて」

俺が指差した机に薰は花を置く

「なんかわざわざ悪いな」

なんとか笑顔をつくつてみせた

でも薰は笑わない

「やめようよ……そんな悲しい笑顔するの……」

バレてる

俺は田線を下に落とす

「タクちゃん……なんでこんな風になるまで無理したの？」

薰は今にも泣きそうな声で聞いてきた

「お前には関係ないだろ……」

「関係ないよ……私たち幼馴染みだよ？」

ストレスが溜まっていたこともあってつい口が滑る

「幼馴染みっていつも所詮は赤の他人だらうが……」

自分でも酷いことを言つてるのはわかってる……わかってる
けど止まらない

「ひどい……やめてそんなこと言ひの？」

薫は泣き出した

「ひどいよタクちゃん！」

「なにが酷いんだ？！俺は事実を言つただけだ！…」

そう薫に言ひ放つと薫は走つて部屋から出でていった

そしてすぐ「ケンが部屋に入ってきた

「！」の馬鹿野郎！…」

殴られた

「何しやがる？！」「薫はタクのためにわざわざ『アメリカ帰つてき
たんだぞ？！』それなのに何だよ今のは？！薫にアタるな！…」

「…………つ！」

アメリカから？
俺のために？

沈黙が1分近くながれた

「殴つたのは謝るよ…………悪かった

「やつこよ… わの俺はさびの者えても殴られて当然だ」 そんなことより早く薫に謝らないこと

「薫はたぶん屋上だよ……早く行つてあげなよ」

「え?……ああ」

「なんでわかつた?
まあ~いいや」

「行つてぐるよ」

俺は痛む足を引かれりながら屋上を田指した

現在屋上

「薫……発見!」

「薫……」

「……なに?」

泣いてはいなが怒つてるね

まあ~当然か

「わつわせぬこ廻わた。」めんーー。」

頭下さげよつとしてバランスを崩し座つてゐる薰の上に倒れる

「「…………。」

今俺らは抱き合つてゐる状態になつてます
なんでかつて?倒れる俺に気づいた薰がかばつてくれたからですよ

「『』、『』めんー。」

俺は薰から離れよつとする……が薰は手を離さない

「か、薰?」

誰かに見られたらヤバいって!!!

「タクちゃん……泣いていいんだよ?」

「え?」

「バスケできなくなつて悲しくつて……でも泣かなかつたんでしょう?ケンちゃんは『タクの奴たぶん泣いてあんな悲しい目になつたんだろう』って言つてたけどそれは違う……本当は泣いても膝は治らないと思つて泣くの我慢してたんでしょ?」

「どうして……？」

泣いても膝は治らない
だから泣かないと決めていた
驚いた……
なぜ薰はわかつたのだろう？

「田を見ればわかるよ……だつて私たち幼馴染みだよ？」

笑顔で答える薰

「ああ～……そう……だつた……な」

視界が段々とボヤケてきた

「泣いてスッキリしようつ…ね？」「あ……ああ」

俺は泣いた

今までにないくらい泣いた

薰は泣いている俺の頭ずっと撫でてくれていた

「スッキリした？」

「うん……なんかスッキリした」

今は泣きやんで2人でベンチに座っている

「うるさいがいつものように戻ってる でもビリビリかなあ」

「なにがだよ？」

「さつきタクちゃんが泣く前に私が泣かされたから、なんかしても
うるさいかな」

「うつー言い返せない

「わかった……何をしてほしい？」

「うーん…………じゃー今度再会したときーー」

「したときーー？」

「さつき私がしたみたい抱きしめて」

俺はベンチから落ちた

「なななな、何言い出しあがる？？」

「はい指切り」

人の話聞けよ！
しかも指切りかよ！

「だめ？」

だあ～泣きそうな顔するな

「わかつたよーほり」俺らは指切りをした
終わると薰は立ち上がった

「もう時間だから帰るね」

「え？」

「実は日帰りといつ約束で親から許可が下りたの」

「そつか……」

薰が帰る

なんか異様にむなしく感じる

「何処かってどーだよ?」

「わからない……でもいつかまたこの町に帰つてるよ」

「でも大丈夫だよー来年には日本の何処かに帰つてくれるから」

「その時にはもう約束忘れてるかもな」
悪戯っぽく笑った

「大丈夫ー忘れられる前に帰つてくるよ……じゃーもう時間だか
ら」

「またな薰」

「またね！タクちゃん」

最後に笑顔で大きく手を振つて薰は帰つた

俺は今、薰が居なくなつた屋上に1人で居る

そして心から誓う

薰や大切な人になにかあつた時

俺は…命に代えても守ると

第17話

「以上椎名拓也の話でした」

「そんなことがあったんだ……その……話してくれてありがとう」

「どういたしまして」

しばし沈黙

「ん？ 瞳が俺と薰を交互に見ながら一や二ついる

「拓也は薰との約束守ったの？」

「なんてこと聞いて来やがるんだ」の悪魔！－！－

仕方ないな……

ここは奥義……！

「わあ～て帰るか？」

話を逸らす

地味な奥義でいいませんね

「約束は守つてもりつたよ」

あ～あ～言っちゃったよ
言つちやいました横の娘が

「拓也の秘密ゲット！」

悪魔を通り越して閻魔大王だな
メモつてんじやねえ！

「……帰ろうか？」

「ケン……そうだな」

俺は靴を履き替えている
振り返るとなつて薰が靴を取り出した……と同時に何かが地面
に落ちた

「なにこれ？手紙？」

え？マジで！？

俺は固まつた

「薰？びつしたの？……なにそれ？」

瞳が薰の手から手紙を奪い取る
そして声に出して読み始める

瞳が薰の手から手紙を奪い取る
そして声に出して読み始める

「ええ～なになに？……『堂本薫様 今日の夕方5時に体育館裏でお待ちしています』って……これラブレターだね」

「「ええ～！？」」

ハモる俺と薫

「今時ラブレターなんてスゴいな」

ケン……感心してる場合か！？

「今は4時52分……薫どうするの？行く？」

なに楽しんでんだよ瞳

つてなに焦つてんだよ俺？

行かないよな？薫？

「行かないよ？」

よし！いいぞ薫

「でも手紙の人が可哀想だよ？会つてきてやりなよ？」

ケン……貴様後で処刑だ

「わかった……じゃ、行つてくんね」

薫は走り出した

止めなきや！」

「薫ーー！」

「なあーー？」

「いや……なんでもない」

「？」

「情けないな俺……」

薫は視界から消えてから5秒経過

「ちょっとトイレに行つてくるーー！」

「トイレどこが、の体育館裏ですか？」

「…………はい」

「またバレた……」

「瞳ー笑うなー！」

「はやく行きましたよ？」

まだ笑つてやがる

「ほら！ はやく走らないと間に合わないわよ？！」

わが二てるよ！」てせん属ねえ！」

足速すぎた?
?

タケ：なに焦ってんの？

え？

「いい加減さあ～………… 素直になりなよ？ なんでタクはさつき薰を止めようとしたのか。 そして今なんで焦っているのか。 自分に素直になれば氣づくはずだよ？」

T

「はあ」…………とにかく体育館裏に行こう

俺は走りながらさつきケンの言ったことの意味を考えた

俺はなぜ薫止めようとしたのか……簡単だ
手紙の主にあつてほしくないからだ
焦っている理由も簡単だ

薰に恋人ができたらイヤだから
なぜイヤなのかも簡単だ

素直になれとはやつこいとか……

ケン……わかつたぜ

俺は薰が好きだ
今なら心からやつこいれる

「薰が好きだ」

口に出してしまった……

横をチラリと見る

ケンが二口二口と笑っている

「やつと素直になれたみたいだね」

「まあ～なんだ……その……サンキュー」

「はいはい」

ケンの処刑は取り消しだな

「瞳誰か来たか？」

「まだ5分前だからきてないみたい」

よ
か
つ
た
ん
?

なにジロジロヤーヤと俺見てんだよ、

実にそこまでの話健太の携帯から聞いたわよ」

- 1 -

「ケンケン！」

ケンやはり貴様は処刑だ

「手紙の主が来る前に薰に自分の気持ち伝えてきなよ」

瞳は真剣な眼で俺を見る

「でもよ……なんて言えば」

《ドン》

瞳とケンに蹴られてかなり吹っ飛んだ
倒れたときに打った腕が痛い

薰と眼があつた

マズい……

「なにしてるのタクちゃん?」

「いや～いい天気だな」

「へ?」

なに言つてんだ俺?

いや実際なに話していいかわからん

薰は困つた顔してゐる

しかたない言つか!

「あのさー

言ひ

「うん」

「いい天気だな？」

「はい？」

無理言えないと！
時計に目をやる
ヤバい3分前だ
もう手紙の主が現れてもおかしくない
しかたない

言ひ方

ひとまず深呼吸つと
「すうー……つはー」

「? ? ?」

なんとか落ち着いた

「タクちゃん？」

「薰…今から俺が言つ」と笑わずに聞いて

いつになく真剣な顔の俺に薰は少し動搖したような気がした

「うん……」

「俺はここに来るまで焦つっていた。薰に恋人ができたらいやだから」

「なんで…イヤなの？」

薰の表情から緊張していることがわかる

「それは……」

俺は笑顔で答える

「薰が好きだからだ」

薰は驚いてる

ダメだなこれは…

フランたな…

「タクちゃん…！」

薰が急に俺に抱きついてきた

「か、薰？」

「私もタクちゃんが好き」

薰の頬が少し赤い

いや、それより…………

マジで？

再度確認

「マジで？」

「マジで」「これは夢か？」

「夢じゃないよ」

ヤバい……顔が熱い

『キンバーンカーンバーン』5時を知らせるチャイムが鳴った
ギリギリセーフだった

あれ？誰も来てないぞ？
変だな……もしかして悪戯だつたか？

「ヤッホー」

なぜお前らが登場する？

「瞳……なにがヤッホー だ！ てか誰も来ないんだけど」

瞳はなぜかニヤニヤしてゐ

「タク『めんな……薰も』

「なに言つてるんだ？」
わけわからん

「手紙よく見てみて」

はてな？

.....

特に変わったところはない！

「ケンてめえー！これお前の仔じゃねえーか！」

「え？ ええええ？」

俺は怒つて
る
薰は驚いて
る
ケンは謝つて
る
瞳はニヤツいて
る

バラバラすぎる

「『』めんーだつてタクが素直じゃないから機会を作つてあげようか
なあ」と

反論できない

「上手くいつたんだし良いんじゃない？」

黙れ閻魔大王！なんて言えない

とりあえず……礼でも言つか?

俺にチャンスを『えてくれたわけだし

「……ありがとよ」

「「どういたしまして」」

「で? これからどうする? 時間も時間だし……」

「タクちやん帰ろ」

「……帰るか」

「僕らはまだ帰らないから」

2人に別れを告げ帰路につく

途中で公園によつてベンチに座つた

話をした……

“じへ普通の話を……”

会話が終わる

「帰るうか?」

俺は言いながら立ち上がる

「うそ……やつだね」

薫も同意し立ち上がる

お互いに田代が合つた

そして優しい風がふいた時

2人はキスをした

手を繋ぎながら帰る2人

.....

幸そうな顔で

『ペコリ』

俺は皿を譲りながらも音の根元である皿覚ましを止める

「寝みい……」

と言いつつ皿を……

此処ベッドの上だよな?

「うわあああーー?」

『ドゴン』

ベッドから転げ落ちた

「…………ん?タクちやんおはよつ

?」

「『おはよつ』『ひよこ』『じやねえ!』なんで薰が俺のベッドに譲るんだよー。」

そう……皿を開けると……皿の前には天使のような寝顔で薰が寝ついていたのだ

『ドタドタドタ』

『バン!』

「拓也!ひこーーー!」

先程ベッドから転げ落ちた音と呟き声を聞いた母さんがビックリし

て部屋にきた

でもいるの状況を見て固まつてゐ

「 「 。 「

ヤバいやバいやバいやバ

「おまえがいわこめす 」

なに普通に挨拶しねの薰さん?!

「え? お、おまえがひやん ちひやん

沈黙

「拓也... あなたまさか! ?

「違つ! 断じて違つ! 」

焦る俺

れひて親父姫場

「じつしたんだへゆれさ 拓君といつてひやん さひやん さひやん

「寝てろクソ親父 」

俺と母さんの蹴りが見事にヒットする

「ホグロー？...」

親父3度田の気絶

「ちと説明してもうこましちつか？」

現在着替えを済ましリビングにいる（親父以外）

「俺も何なのか……田を覚ますと隣で薫が寝てた……って薫ー。」

「え？...なに？」

「なぜ俺の部屋に……こやこいつから俺の部屋にいた？」

返答しだいでは俺が親父の一の舞に……

「ええ～と……朝5時頃にたまたま田を覚ましてタクちやんを脅かしてやるのと思つてベッドに入つたらそのまま寝けやつたの」

いやそこ笑顔で答えるといじじやないかい

とつあんず命の心配はなそりだ

「よかつたわ……もし私の考へてることだつたなら拓也と父をさせの世から消えていたわよ？」

なぜに親父も？

母さんもしかして親父のこと嫌いなのかな？…………まあ～どっちでもいいや

俺は薰が座っている方向に体を向ける

「薰よ……今後このような悪戯は禁止だ。俺が消去されてしまう

「え～…………わかった」

納得しろよ…………

朝から疲れた

「おはようお2人さん…………タクなに疲れてるの？まだ朝だよ？」

「ケン…………実は朝から」

説明中…………終了

「なるほどね。それは災難だつたね」

ケンは苦笑してる

「薰……次したら部屋への立ち入りを禁止するぞ」

「「「めんなさい…もうしません」

「『恋人』っていう関係になつたのに、二人とも変わらないね」

笑いながら言うな

「一日で変わるわけないだろ?」

「でも昨日キスしたよ」

「…………。」

言つちやつたよ

また暴露しやがつたよ」の娘は……

「……ハハハ」

笑うしかない
もつ笑うしか

「タクちゃん? どうしたの?」

「頼むから付き合つていい」とキスの「」とは誰にも言わなこつて
約束してくれ

「えー? なんで?」

自慢する気だつたのか!?

「俺が」の世から消えてもいいのなら言へ

「わかった……言わない」

薰は頬を膨らませている
まったく納得していない

「3人ともおっはよー。」

朝から元気だな瞳……

「おはよう」

「おはす……」

「ちよつと拓也……なに朝から死んでんのよ?」

「説明するのメンドクサイ……ケン頼んだ」

「わかった。実は……」

説明中……
終了

「拓也……言いたくないけど言つね……」愁傷様

「勝手に殺すな…まだ死んでねえ！」

「だつて……アレ」

と言つて瞳は横に指を指す

「は？ なに…………俺は死ぬのか？」

「高確率で死ぬわね」

瞳が指さした場所には黒板がある

俺は今わかつたよ

教室に入つてなぜ男共に殺意に満ちた目で睨まれたのかを……（なぜか女子たちは涙目で俺を見ていた…なんでかな？）

黒板には『椎名拓也と堂本薰は付き合つてゐる』と書いてあるのさ

泣いてもいいですか？

「タクちやん大丈夫？」

「タク元氣出せ！」

拓也死ぬな！」

現在放課後

卷之三

あのな……心配してくれるのはうれしい……か！」

「？」

俺は椅子から立ち上がる

——午前中——

「椎名あれマジか！？」

「おい！説明しN！」

責めに

ただでさえ朝の騒動で疲れたのに

誰だよ？

黒板にあれ書いた奴！！

とにかくコイツ等どうにかしないと

「薰！ 説明…… 薰？」

説明するの手伝ってほし」のに

..... 薰が居ない

..... ケンと瞳も

居ない..... あ！ 居た！！

..... 教室の外に避難してんじゃねえ…… あ…… 居

なくなつた（泣）

「説明しろよ椎名！」

「椎名君どうこうこと？」

誰か助けて……

てなわけで朝から死にかけたワケ

「ゴメンなさい」

「「以下同文」」

「これにはムカついた

「薰は許すが……そこの人……なにが『以下同文』だコラ～！
……逃げ足速やすぎ」

薰を見た後に2人の方向を見ながら叫ぶとすでにいなかつた

「タクちゃん帰る？」

「ああ～帰つて寝たい」

俺は死人のような目で薰と手を繋ぎ家に帰つた

風呂から上がりコビングでテレビを見ていると薰が

「タクちゃん明日ひま？」

なあ～んて聞いてきた

たしかに明日は日曜で暇だ

「ひまだな……なんでだ？」

「映画見に行かない？」そんな上田遣いされたら嫌とは言えん
はじめから言つづれはないけど……

「オーケー行こ！」

「やつた～ ありがと！」

「『ハーパー』抱きつくなーーー。」

母さん達が見てるだろ？が！

「えー……せつかく彼女になれたのに……」

『パリ』

皿が割れる音が……

キッチンにいる母さんが驚いてる

キッチンの前にある椅子に座っている親父はなぜか笑顔だ

『バス！』

不意に親父が後ろから殴られた（まな板で）

母さん……なぜに親父を殴った？

親父は笑顔のままで氣絶してるし……キモい

「そー説明しろー。」

母さんが笑顔で命令する

「……はー。」

結局家でも休むことができなかつた

「恐かつたねあの映画」

「どうか？俺は周囲の日が恐かつたぞ？」

「「」みんなさー」

現在喫茶店

さつき薫とホラー映画を見てきたのだが……

「確かに周りの人たちも叫び声を出していたがお前のは異常だ」

薫は普通の人の3倍うるさかつた

おかげで俺は周囲の人から睨まれていた

「だつて恐かつたんだもん……恐いの苦手なんだもん」

ホラーを選んだの貴女様ですよ？

もういいや……

「次どこ行くんだ？」

今日のプランは薫に任せている

「次はね……秘密 とにかく付いてきて」

「」

「ゲーセン？ 薫ゲーム好きだったのか？」

「違うよ！ 田的是アレだよ」

「薰が指さす方向には……」

「…プリクラ？」

「うん 行こ！」

手を引っ張られ強制連行

「えへへ」

「薰は笑いながら先ほどのプリクラを携帯に貼つてる……つておーーー！」

「なぜ俺の携帯にも貼る？！」

「2人が恋人である証だよ」

「そつか……」

なぜか納得しちまつた

「あータクちやんアレ何のお店ー!?

「あ？ あれは…………なんだろ？ 行つてみるか？」

「」

.....

「タクちゃん? 早く行けりや?」

笑顔で答えた薫が可愛かつたため思わず見とれてしまつていた

「すまんすまん」とりあえず謝る

店に入るとアクセサリーがビックリする程置いてあつた

「すごいね……」

薰は驚いてるがそれと同時に田はメチャメチャ輝いている

「薰さん？」

「わあ～！これスゴい可愛い～！～あ、これも可愛い」薰はアクセサリーに夢中

俺は周りを見渡す

よかつた……

俺ら以外客は居ないみたいだ

店員さん笑ってる

でもバカにしたような笑い方じゃなくて優しい感じの笑い方だ
どうかで見たことがあるぞ?
はて?
誰だっけ?

あり?

「久しづりね。拓也君」

「……思い出した! 瞳の姉ちゃんだ! ……名前何でしたっけ?」

「え? 覚えてないの? 晴美だよ」

「そうそう晴美さんだ!」この店で働いてるんですか?」

「店長だよ それよりあの子誰? 彼女?」

「え~まあ~

「可愛いじゃない!」

「ありがとうございます!」

あり?

そういえばさつきから薫の声が聞こえない

振り返つてみる

居た！！

ん？手に何か持つてる

なんだろ？

「薫？」

「ひやー？ー」

近づいて話しかけると変な声で返事された

「それ気に入つたのか？」

薫の手にはネックレスがあつた
形はハート

「うん……まあー…………」

「マイツが物のことで言葉を濁すときは値段が高ことさだ

値段をみる

確かにいい値段だな

「買つてやるよ」

「え？！そんな悪いよー。」

「いいんだよ。俺が薫にプレゼントしたいんだ」

「タクちゃん… ありがとう…」だから抱きつくなつて！
ここ店だから

ネックレスを買つて店を出るとそこ

「拓也君とその可愛い彼女さん…またきてね」

つて言われた（薫にはレジで晴美さんのこと教えた）

「「また来ます」」
と言つて店を出た

家に着くとすぐに薫はネックレスをつけた

「どう？似合ひ？..」

メッチャ可愛い！

……なんて言えないの

「似合ひでぬよ」

すると薫は可愛らしい笑顔になつた

「ありがとう！ 大切にするね」

薫が俺の頬に軽くキスをした

俺は顔真っ赤になり
薫は笑顔で抱きついてきた

俺は今幸せの絶頂にいた
が母さんが帰つてきたことによつて質問攻めにあ
あえなく破壊された

第22話

「拓也！た、大変よ！..」

「瞳..朝からひるさい」

走つて教室まで来たのか瞳の呼吸は乱れていた

「そ、そんな」と..い、言うわけ？あんたに関わることなの..」

「すいませんでした！で何が大変なんだ？」

俺に関わつていて大変なこと.....なんか恐いんですけど？

薰の呼吸が普通に戻つた

「アイツ等が帰つてくるのよ！」

誰がだよ..

.....ヤバい.....一つだけ心当たりが.....

「まさか.....桜と元希じゃないよな？」

「どうか違う也許よ！」

「そのまさかよ」

「「…………。」「

「????????」

俺とケンは凍りついた
薫はキヨトンとしている

「「いつ帰つてくれるんだ？」」「

できるだけ遅くなることを切に願う男組

「今日よ…………」

「「みんな久しぶり！……」俺ら3人は声が聞こえた方向をみる

「拓也元気だつた？会いたかつたよ……！」

そう言つて1人の少女が飛びついてきた

ぎや~~~~~！！

この体勢じゃ避けね~~~~~！！
つて薫の目が恐い！！

『ドゴー！』

瞳が俺に飛びついてきた少女を木製のバット（ビリにあつたんだ？）

で叩き落とした

「痛つたあああ…ヒドいじゃん瞳…」

「相変わらず頑丈ね」

「瞳ナイス判断だ」

「みんな久しぶり」

少女と一緒に教室に入ってきた少年が話しかけてきた

「「「元希は歓迎する」」」

「ありがとう」

相変わらずクールだな

「ちよつと私は?つて誰この子」

視線の先には薫が居た

「私はこの前転入してきた堂本薫です」

「あ、あの噂の?」

なんの噂だよ

「私は吉野桜よ！でこれが田中元希」

「よろしく堂本さん」

「薰でいいよ おお～！！

なんて眩しい笑顔なんだ

「お～いHR始めるぞ」

担任が来たので強制的に会話終了

「イギリスに旅行？」

現在昼休み

事情を知らない薰に2人が説明している
ちなみに6人で食事中でもある

桜テンション高すぎ……

「そこのー私達の親同士が仲良くて時々みんなで旅行に行くの」

「俺は「」のおかげで一日一日の疲労が半端ではなかった

安易に予想できるぜ元希

お前が桜によつて死になつてゐる姿がな

『やつじえぱわつも何で桜はタクちゃんに飛びついたの?』

「タクちゃん!?? なにその呼び方は?...どうこう」と?』

ヤバいやばいやばい

またアレが始まる

ケンと瞳そして元希は可哀想な田で俺を見てい
てかちやんと助けてね

「え? だつて昔からタクちゃんとケンちやんはそつ呼んでるからだ
よ?」 薫は不思議そつに言ひ

「なんだ! えーとわつき私が拓也に飛びついたのは久しづりにフ
イアンセに会えてうれしかつたからよ』

またまた空気が一瞬で凍りついた

気が付くと俺ら以外のクラスのみんなは教室の外に避難してゐる.....

「タクちゃんビリビリ」と?』

薰の田が恐い!

俺はすぐにケン達にアイコンタクトで助けを求めた

『助けて』

『了解』

「タクちゃん聞いてるのー?」

怒鳴りだした薰を瞳がなだめる

「違うのよ薰! あれは勝手に桜が言つてんの」

「そうだよ薰」

ナイスタイミングだケン

「何言つてるの瞳? 拓也も私のこと認めているよ」

認めてねえー

と言つ前に薰がキレた

「タクちゃんのバカ! アホ! 最低! 变態! 浮氣者! ...」

好きな女の子にまでボロクソ言われるとさすがにキツい
特に最後のセリフとかね

「何ヒドい! と言つてるのよ薰! ... 拓也が

『ドックーナン』

す!」に鈍く大きな音に全員が静まりかえる

「とにかく落ち着いて話し合え」

音を出した張本人である元希は冷静にそう言った

大きな音は元希の拳が黒板を叩いた音だった

「で？ 桜は本当にタクちゃんのファイアンセなの？」

「やうよ」

「……「違う。あり得ん」」

「これを人は完全否定と言つ

「拓也……せつやとコレと元希に真実教えてあげなさいよ」

瞳には桜が物として見えているのか？

「真実つて何？」

いや……ね

桜さん……

貴女様が目を輝かすような真実ではありませんから

「なんなら僕が代わりに言つてあげよつか？」

ケン……できれば立場を変わってほしい

「いや俺の口から言つよ……スー……ハー」

深呼吸して……
さー言つぞーー！

「『桜は好きだよ。でも友達としてであつてファインセとかそういうのは無理だ。俺は薫が好きなんだ……薫も俺を好きでいてくれている。今俺と薫は付き合っているんだ。だから諦めてくれないか?』
って言おうとしたんだろ?」

え?

「「「「は?」」」元希以外の4人が俺を見てくる

「…………全くその通りです。一字一句たりとも間違いはござ
いません」

「「「…………。」」」

『『『『元希つて…………何者?』』』』

心の声がハモつた気がする

「相変わらず人の心読むの得意だね…………つて拓也びつこつ」と
!?

あなた方は突然首を絞められたらいどうしますか？

多くの人は驚き何もできないのではないでしょうか？

「は、離……せ……」

意識が……

「…………」

「保健室だよ」

「うお？！」

ビックリした……

「薰いきなり話しかけるな……ビルだろ？」

「タクちゃん大丈夫？歩いて帰れそう？」

「歩いて帰れるよ

帰る?

はて? 今何時だ?

6時か

6時!?

「俺こんなに寝てたのか?」

自分で自分の体の構造疑つわ～～
マジで!

「うん可愛い顔してたよ

「な、なに言つてんだお前? !」

「だから寝顔可愛いかったよ

俺はたぶん今顔が赤い状態にあるだろつ

.....ん?

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

なにやら無言の殺意みたいなモノを感じる

あ……………みなさん居たのね

「心配して損したね」ケン！？
優しいケンがこんなこと言うなんて……

瞳恐いつて！

「ハア

元希？

なんでため息をつく
ん? なに?

その人差し指の先には何が？

桜の後ろに般若が見える

「ひょい！」

またその反応かよ！

「絶対拓也を貴女から奪つてみせるんだからーー！」桜は走り去つて
いつた……

「……帰る？」「

俺はそれしか言えなかつた

だつてみんな啞然としてから

大混乱が起きたあの日から色々（数えきれない）あつたが学期考査も終わり冬休みまで残り2日となつた

そんな時だつた

「今年の冬休みみんなで旅行に行かない？」

「瞳マジで言つてんのか？」

「この娘は計画も立てずこきなり何を言い出す

「旅行つていつても北海道にある私の別荘でみんなで年越さないつてこと」

「ちよいまちー！」

「北海道ー？」

「いやー！それより…」

「お前の別荘なのか？」 いい間違つだよな？

「そうよー何か文句でもあるのかしら？」

「ないです……」

瞳つて何者？

知つたら何かとんでもない」ことになつたのでスルーしようと

「みんなどうする?」

そんなに睨まれたら

「「「「「行かせていただきます」」」」

断れないとやん(泣)

「よし決定!! 31日から3日間だからね」

みんなで年越しか
悪くないな

「旅行楽しみだね」

カレーを作つてこる薫は本当に嬉しそうに話してくれる

「やうだな……でもその前にクリスマスがあるぜ?」

「ふふふ……どうちも楽しみ」

今年は

いや今年からせりふイベントは楽しいかも……

そんなこんなで3日過ぎた

現在ケンの家にてみんなでおしゃべり中

「タク明日親父が病院に来るよ」
「行ってたよ」

「『ヤベー。忘れてた』だろ?」

「その通り

「私も明日付いて行くね」

「薰が待合室で寝な

「誓いますーー!」

まだ最後まで言つていないのでよくわかったね

瞳?

なんで薰の胸もとをジーット見てる?

「薰そのネックレスビューティーしたの? 可愛いじゃない」

ネックレスって……

まさか!?

「これはタクちゃんが付き合つて初めて、テートした時に晴美さんの
お店で買つてくれたの」

そんな幸せ顔で言われる俺の方が照れちまうだらうが

「晴美つて私のお姉ちゃんのこと?」

「「はいな」」

「もうなんだ……って桜つるやー……」

『ベシー』

瞳のチヨップがヒットする

「痛あああ!」

桜は薰がネックレスの話をした後にずっと

「ヴーーー!」

て黙みたいに唸つてたから瞳に叩かれても仕方がない

「みんな晩ご飯用意ができたみたいだよ

ケンはいつもタイミングがいいな

「8時半か…それなら帰らうかね」

「…贊成」「」

薰の声だけが聞こえない

マジかよ…

「寝てゐる」

「ホントだー可愛い寝顔しきりって。拓也もやう思わない?」

「うん」

あ…つい口が滑った

チラリと4人を見る

瞳ニヤけてる

ケンもニヤけてる

元希ため息付いてる

桜キレ氣味の笑顔！？

コワ！

氣にしてはダメだ！

氣にしたら負けだぞ俺！

「薰は俺がおぶって帰るから……じゃー」

俺は逃げるようにケンの家を出た

歩いている間薰は全く起きる氣配を見せなかつた

「メモリー要素なしです

『キ——！』

『ガシャン——！』

私はその音に驚きながらも音がした場所に目を向ける

見てみると誰かがトラックにひかれたみたいだ

私は近寄つてひかれた人の顔を見て驚愕した

なぜならその人は私の世界一大切な人だつたから

彼の名前を呼ぶ

返事がない
動かない

私は諦めずに名前を呼ぶ

でも私の声は彼には届かない

それでも私は名前を呼び続ける

「タクちやん……」

私は叫びながら上半身を起こします
「こは…私の部屋？」

「夢…だったの？」 わたしのは夢だったの？

でもとつてもリアルだった

もし夢じゃなかつたら？

イヤだ……

もしドアを開けて彼がいなかつたら?

私は隣の部屋へ急いだ

そして部屋の前で立ち止まる

そつ思ひと怖くなつた

お願いだから居て！！

私は恐る恐るドアを開けた
『ガチャ…』

……居た

「薰…目が覚めたのか？」

タクちゃんが居る
そのことに安心したら涙が流れた

どうしたのだろう？

今俺の目の前で大切な人が……………薰が泣いている

「薰どうしたんだ！？」

薰に近寄つて両肩に手をやる

「タクちゃん……」薰は俺に抱きつこうとした

まだ泣いてる

抱きしめながら頭を優しく撫でる

「薰……なんで泣いてるんだ？」

「あのね……グスツー夢をみたの……怖い夢だった

怖い夢？

「どんな怖い夢だ？」

泣くほど怖い夢だったのだろうか？
ならなぜ俺を見て泣き出したんだ？

「グスンー……タクちゃんがトラック……

俺がトラック？

？？？？？？

「タクちゃんがトラックにひかれて死んじゃつ夢をみたのー。」

薰は俺がいなくなる夢を見て泣いている

泣いてるのは俺がいて安心したから

「…………つー。」

嬉しかつた

薰が俺をそこまで想つていてくれていることが嬉しかつた

「馬鹿！俺はそんな簡単に死なねえよ」

「……だつたら約束して」

泣きやんでいるが涙目だ

「約束？」

「絶対に死なない…居なくならないつて約束して」

「約束する…大丈夫。ちゃんと約束は守るよ」

笑顔で答える

「誓いのキスして……」

「ああ」

優しいキスをする

約束を守るための
誓いのキスを

「「行つてきます」」

ドアを開け薰と外に出る

俺は外に出てすぐ薰に手を差しのべる

意外と恥ずかしい + 勇気が結構いりますね

「え？あ！もしかして昨日買つたガム欲しかったの？ごめん…家に置いて来ちゃつた……」

貴女の頭大丈夫ですか？

まつたく……

「誰もガムが欲しいワケじやねえ！…」

少々怒鳴りながら薰の手をとつて歩きだす

「え？……あ」やつと理解したか

「ふふふ…タクちゃんの手温かい」

「そつで」やんすか」

そんな可愛い笑顔で言われると俺の血が急激にスピードアップしちゃいますよ?

そんなこんなで本日初めての目的地に着いた

「叔父さん……まだバスケをしてはいけないんですか?」

最近は膝の痛みは全くな

それに単純にバスケがしたかった

「前にも言つたが君の膝はモロくなつてゐるんだ。それに完治していない。体育の授業と違つて部活は毎日あるだろ? 今部活を始めたら怪我が悪化して治るのにかなり時間がかかるんだよ? わかつたね?」

やつぱりダメか……

あと半年待つてみよう

「わかりました。ありがとうございました」

俺は診察室をでて薫を探す

居た居た

「薰……薰？」

また寝てる

昨日はあの後なかなか寝れなかつたみたいだし仕方ないな…

「薰起きな」

薰を揺ると意外とすぐ起きた

「ハツ！？私また寝てたの？」

「寝てたな」

薰は急にソワソワしだした

トイレか？

「タクちゃん怒らないの？私約束破っちゃつたし

約束？

ああアレか

「今日特別に許す」

仕方ないさね

途端に薰は笑顔になった

「ありがとうタクちゃん大好きーー！」

また抱きついてきた

抱きつき癖でもあるのかコイツ？！

「馬鹿！此処病院だぞ！？抱きつくなーあと大きな声で恥ずかしい」と叫びつなーー！」

「それはアンタもね

「、の声はーー？」

「瞳？なぜにお前が此処にいる？」

「どうみても瞳は元気そのものだ

「実は昨日アンタ等が帰った後に桜と元希がヤラカしたのよ

昨晩

「逃げ足早いわね」

流石ね

と私が感心していると

「拓也帰っちゃった。ガツクシ」

桜ホントに拓也「〇〇△だね

「IJの際元希に乗り換えれば?」

半ば「冗談で私は言つた

「レがまずかつた……

元希は

「俺が迷惑だやめてくれ」

氣のせいかな?

少し元希が動搖したように見えた

「なによおーーこんな可愛い私が迷惑って言つの?ー」

確かにアンタ顔は可愛いよ

ただナルシーだからダメだね

「黙れこのナルシスト!」

元希にしては目面しく怒鳴つている

「もしかしてホントは桜が好きだつたりして」

「そんなワ」

ケンの発言にキレたのか元希がケンに迫りついた時だった……

「元希のバカー！！」

桜に元希が吹っ飛ばされた

その勢いで窓に衝突……

『パリーン！』

窓ガラスが割れた

「マジ痛てえ」

痛いのならそれらしい反応してほしいわね

え？この赤いのもしかして……

血？

「　　。」

「ヤバい……血止まんねー……もしもしすいませんが救急車お願いし

ます。住所は「

血を出してる張本人は至って冷静だった

ついには自ら救急車を呼びだした

「てなワケで元希のお見舞い……のつもりだったんだけど

だけど？

「病室で桜と喧嘩してたからやめた」

「ははは……」つてゐるぞ薫

「まあそういう事だからお見舞い行かない方がいいわよ？じゃ私は帰るわね。バイバイ」

そう言つと瞳は病院を出てまたタクシーに乗つて帰つて行つた

ひとまず

「俺らも外にでるべ？」

「そうだね」

俺は診察代を払つて薫と外に出た

「これからどうすの？」

うん……

それなんだよな
実は薰のクリスマスプレゼント買いに行きたいんだけど本人居るし
な……どうしよ？

「私買い物があるからタクちゃん先に帰つてもいいよ？」

チャーチンス！！

「じゃ～お皿葉に甘えるかな」

「うん じゃ～ねタクちゃん」《チユ》

薰は俺にキスをして何処かに行つてしまつた
多少薰の顔が赤かったような気がする

「さてと……俺も行くか」

いざ最終目的地へ！

『カラソカラソ』

「いらっしゃ……拓也君？」

「……」

もう……」は晴美さんの店

店名は『HARUMI』

まんまだな……

「今日はどうしたの？ 可愛い彼女はどう？」

キヨロキヨロと嫂をないでぐださらない？

「実は薫に内緒で」

「クリスマスプレゼント買いにきた？」

なぜ後ろから聞き慣れた声が？

「ケン！？なぜに！？」

「瞳へのクリスマスプレゼントを買いに だつて前にタクが薫に買つてあげたネックレスが可愛くて羨ましがつてだから此処で買おう

かなつと思こまじて「

なるほどね

「へえ～瞳そんなんこと一皿も私に皿つてこなかつたの」「
晴美さん……そんな落ち込まんべうだせーな

それにしても……

1つ気になる」とが……

「何で袋が2つあるわけ?」

「これのこと?」「

他に何があるのかね?」

今変な口調だつたが気にならぬことで下をこな

「これは元希が前來たときに買おうと決めてたらしくて代わりに買つてくれるように頼まれたから仕方なく……あー実は元希いま

「入院中だら～へり瞳に病院で会つた時に全て聞いた……つて元希
誰にプレゼントする気なんだ?」

「 桜 ？」

沈默

「 」 は 」 は 」

2人して笑う

フザケるのはいいがでにして早くプレゼント買わないと

でも何買えばいいんだ?

うん

そうだ！

「晴美さんのお勧めで何かないですか？」

「え? そうね~…………あ!」

お
！
！

何かあるのか！？

「「なんかどう!？」

11

田の前には指輪があつた
綺麗な石が星形となつて3つ埋め込まれていた

これだつたら喜んでくれるかもしれないな

「コレ下さい！」

「わかつたわ プレゼント用にラッピングする? つてその前に指輪
のサイズは?」

ヤバい……
わかんねえ

え?
ケン?
誰に電話を?

「もしもしし瞳? 薫の指のサイズわかるかな?うんわかつた あ
りがとうえへと晴美さんサイズはこれです」

「え?ええわかつたわ」

「.....サンキュー」

「どういたしまして」

いきなり電話で聞いてくれるとほ.....

それよりなぜ瞳は薰の指のサイズを知っているんだ?・後でメールだな

「拓也くん?・ラッピングする?・」

「え?・あ…お願いします」

「で?・いくらなのタク?・」

聞くの忘れてた…
いくらだろ?・

「晴美さん…「」の値段は?・」

「言わなかつたっけ?・」

はい
言つてません
聞いてません

「実はわつを完成したばかりで値段決めてないのよね?…・・・・・
しそつが?・(笑)・」

笑うと「じやあつませんよ?・

実際

「どうすると言われましても?・な?・」

ケンに同意を求める

「だったら… 適当でいいんじゃない？」

この人たち異常だ

「じゃ～ 適当に4・000円でいいわよ？」

「値段が微妙すぎますって… とか安くないですかー？」

「いいのよ？ 適当なんだし（笑）それにあの子にきつと似合つだうしね」

ちょっと想像してみる……

たしかに似合つな

「わかりました… その値段でお願いします」

ラッピング中

終了

「彼女きつと喜ぶよ？ なんたって私の傑作なんだから。 じゃ～2人

とも帰り道気をつけてね

「「はいー。ありがとうございました」」

「どういたしまして またねー。」

ケンと一緒に店を出た

「タクどうやつて帰るの?」

「歩き… かな?」

「自転車の後ろ乗る?」

「乗る!」

ケンと2人乗りは久しづりだ

そんなことより……

『早くクリスマスイヴになれ
と心底思つた

第28話（前書き）

元希視点です

「「……。」」

無言のまま睨み合つて2時間経つた

流石にキツいな

だがここで田を逸らせば俺の負けになる

それだけはイヤだ！

――2時間程前――

「だいたいお前が怪我させたのが悪いだろ？」「

怒っていても冷静にならなければ思考が動かない

「元希が迷惑だのナルシストだの言つからでしょー！」

（

喧嘩が始まったのは簡単なことだ

俺に怪我を負わせた（右の一の腕と右の脇ら脛を何針か縫いました）

そして桜の逆ギレ

「だから俺に謝れ。小学生でもできる「」ことができないのかよ？」

「なによー？私が小学生以下とでも言いたいわけ！？？」

「だれも」

『ガス！』

「「痛つて（――――）」「

なんだ？

今なにが頭にあつたんだ！？

下を見る

林檎！？

「あんたらウルサいわよー！」「病院！？」

「「瞳痛いんだけど？」」「

ハモつた……

桜：

貴様あからさまに嫌そうな顔するな！

「そんなんに元気ならお見舞いに来き意味なさうね……私帰るわ

え？

いやいや、林檎ブツケに来ただけですやん！？

「あと此処病院だから静かにしなやこよ~じや~ね」瞳は風のよう
に去つていった……

で現在に至るわけ

『ガラガラ』「「ーー」」

なぜ窓が勝手に

「やーー元つてちょっと待つてーこれーー」

ケンは迫りくる俺の拳に焦り、なにやら袋を前に出した

「ほり頼まれた例のモノ」

「…………。」

俺は無言で受け取る

つて！

「ケン此処3階だよな？」

なぜ外の窓から此処に来れるー?・

「此処僕の親父の病院だからこれくらいこの上なうで出来るよ」

意味不明だ

もつ迫求するのをやめるのが得策だな

「とつあえず……これサンキュー」

「じついたしまして で、誰にあげるの？」

「誰でも良から」

「なにその袋の中み？」

「！？？」

『ペシ-』

桜が袋に触ろうとしたので焦つてその手を叩いた

「痛い！なんで隠すのよ？！」

「別に何でも良いだろ？ーとこかくコレに触るなー！」

焦っているためか怒鳴つてしまつ

「誰にプレゼントするの？？」

ケンがしつこいのでつい口が滑る

「好きな人にだ！……あ

言つてしまつた

「へえ～誰なの？」

「ケン今すぐ帰れば命までは取らんがど……逃げ足速いな」

瞬間移動並の速さだな

「…………。」

なぜ黙つてるんだ桜?
まさか!?

「帰る」

え?

帰るのか?!

引き止める理由もないし仕方ないな

「わかった氣をつけろよ?」

「わかつてゐるわよ。明日迎えに来るから」

そう言つて桜は病院を出て行つた

桜が居ないと暇だな
……

第29話

なぜなんだ？

朝までは

『タクちゃん大歓迎』

の文字が

『タクちゃんのみノックすること』

に変わっている……

薰の部屋のドアに掛かっているホワイトボードは書き直されていた

俺何かしたか！？

『コンコン』

「俺だけど？」

沈黙？

あ……微かに何か音が……

「どうぞ」

機嫌は良いみたいだな

ガチャヤ

卷之二

いつもと変わらない可愛い笑顔で薰は迎えてくれた

「な……何で俺だけノックしなくてはならない?」

「なんでもだよ。あと3日だけ我慢して」

「え……わかったよ。話が変わるけど瞳からメールきたか?」

携帯を開き先ほど瞳からきたメールを見せる

【桜の様子が変（＝一＝；）明田みんな桜の家に集合してくれない

「私にもきたよ。タクちゃん行くよね？」

「おう! じゃ2人とも行くつてメールしと……ん?」

メール受信中

受信完了

瞳からだ

【じゃ～1時に集合ね（ ）よろしく】

「…………。」

盗聴でもしてんのか！？
瞳ならありえる！！

「タクちゃんどうし」

薰が携帯を覗く

「「…………。」」

世の中に何人いるだろ？

友達のメールで恐怖した人が何人いるだろ？

今2人は固まっている
フリーズ

「拓也～薰ちゃん！～」飯できたわよー！」

「…………行こうか？」

「そうだね…………」

「瞳……怖いな

「うん…前は神様の存在否定してたしね」

マジで？！
怖！！

今日夢に瞳が出ないと願わずにいられなかつた

「桜何があつたか？」

「別に……」

確かに変だ

桜は俺に会うと高確率で抱きついてくる（瞳が呻き落とすナビね）
なのに……

俺が家にきたのに全く反応がない……！

奇跡！ ！

なーんて言つてる場合じゃないかも

桜のテンション異常に低い……

「元希と喧嘩でもしたの？」

『ピクー！』

今薰の質問にピクーつてしまつたよね？

「別にしてないよ？ てゆーか何でみんなが家にいるの？」

貴女が変になつてゐるから畠で来ました…………言えない

それより……

確かめたい」ことが……

「喧嘩？」

「しない」

即答か……

まさかわざとピクーつてしたのつて……

「元希と喧嘩？」

《ピクー!》

やはり元希絡みだな
てかみんな氣づいたみたいだな……

《せーの》

アイコントクトで合図を3人に出す

「「「「元希ーーー」」」

《ピクー!》

《ドスンー!》

そんな椅子から落ちるくらい驚いたのか！？

「痛た……」

テンション低いつて！

いつもなら

『痛つた――――!』

つと――なる

ここまでとなると重傷だな

「元希と何があつたんだ？」

「……ずっと幼稚園から元希と一緒に……隣にいることが普通になつてたんだよね……」

……へ？

「それがどうしたんだ？」

「昨日元希が健太に頼んで誰かへのプレゼントを買ってきてもうつてた」

昨日？

ああ～あれか！

「そのプレゼントって誰へのものだったの？」

桜の表情が暗くなる

「好きな人にだって」

.....

「マジだよ。僕もその場で直接聞いたから

「マジだよ。僕もその場で直接聞いたから

「誰だろ？ わ

「ヤツくな瞳！

いや.....

閻魔大王！

「で？ 元希に好きな人がいるのとその元気のなさはどう関係があるんだ？」

しばし沈黙

「その.....仮にだよ？ 仮に元希に彼女ができたら今までみたいに

一緒に学校に行つたり、帰つたりできなくなるじゃなし？それに毎食だつて食べれなくなるかもしれない……いやもしかすると話すことさえできなくなるかもすれないと……そう思つたら

「寂しくなつたの？」

薰の質問に

「うん」

とだけ答える

「やうか……へ？簡潔にまとめる」と元希に彼女ができるなら嫌つてこと

桜は

「うーん……」

と言ひながら首を傾げている

「やうかもね」

認めた

いやそれつて単純に

「元希が好きつてコトだろ？」

「はあ？！だ、誰が！」

「桜がでしょ？あなたの話の内容からはやうとじか考えられないけ

「……………？」

「……………え？」

瞳の言ひとおりだな

あれ？

桜の顔が徐々に赤くなつていく

「えええ！？ だつて私は拓也が好きなはず！…ありえないってそんなの！」

「じゃ～元希に彼女ができるも文句は言えないね」

薰の発言に桜は下を向いてしまつた

「素直になれよ桜」

「それ僕が前に言つた台詞じやない？」

「ちつ～！
バレたか

「素直… そつだね。自分の気持ち認めないとね… 私元希が好き… なのかも」

「なのかもじやなくて好きなんだろ？ 素直になれつて

「元希が好き」

桜が茹で蛸にみたい真つ赤っかになつてゐ

「拓也」めんね…貴方とは付き合えなくなつちゃつた

「それは助かる」

本音100%!!

「なにそれ…? 酷くない?…」

よかつた

いつもの桜に戻つてゐる

でも先程から大事なこと忘れている気が…

「タクちゃん…何か大事なコト忘れてない?」

「え? 薫もか?！」

「うん……タクちゃんもなの?」

「おひ」

何だつけ?

何を忘れてんだろう?

あ……

思いだした

「桜が元希迎えに行くのって何時だっけ?」

「2時……今何時?」

「あてはお前も忘れていたな……

「2時5分……」

「私ちよつと行つてくるーー。」

桜がいなくなつて数秒

「どうする?..」

「ひとまず応援しましょ?」

「賛成だね」

「私も」

しばらく桜に協力することが決まった

第31話

「From 瞳

TO 拓也

24日のクリスマスパーティーという名の文化祭は校門前に4時集合ね(* * *)あと例の2人も呼んであるから(+ + +)元希には他に誰か連れてきても良いことにした……女限定で(- -)」

12/24

「タクちゃんまだなの?」

「今行く

部屋のドアの前で待つ薰に返事しながら最終チェック中

財布……
携帯……
持つた

プレゼント……
持つた!

最終チェック終了

「遅いー！」

「…………。」

「タクちゃん？？」

「急いで着替えてこい。私服にな」

何で制服やねん！！

確かに今から学校のクリスマスパーティー（文化祭）に行くけど担任が

「私服でいいからな」「
つて言つてただろうが！」

「え？あ！そうだった！ちょっと待つてー！」

《ガチャーバタンー》

《ガチャヤ……》

！――！

「せつかく新しい服買つたのに忘れ……タクちゃんっ・ビ・ジ・ツしたの？
私の服に何か付いてるの？」

いやその

「似合つてゐる……可愛いぞ」

ハ！？

俺は何口走つてんだ？！

薰の顔が赤い

可愛いな……

俺は何考えてんだああ！

邪念よ消えろ――！

「あ、ありがとう……タクちゃん時間が……」

時間？

《力チ》

携帯を開く

3時50分……

「何とかなる……急べぞ」

薰を自転車の後ろに乗せ俺は「」始めた

「おっ……す……ゼゼゼ」

キツい……

「何息切れしてんのよ? 今からクリスマスパーティーだつて言いつの
に」

「仕方ないよ……タクちゃん家から全力でこいで此処まで来たから」

「お疲れタク。はいお茶」お茶を差し出すケンが神に見える

《ゴクゴク》

「生き返った……元希と桜は？」「…？」

「まだ来……あ…来た来た」

「遅くなつてすまん。俺が向かいに行くまでコレが寝たらしく何
も用意してなかつた」

「いぬ～～ん」

『元希他に誰も連れてきてない（な）（ね）（。）（わね）』

『 』

「他に誰かと此処（地面を指差す）で待ち合わせしたの？」

瞳ナイスな質問だぜ！

「してない。此処（校舎を指さす）にこなれば皆こるだろ？だから他人とする必要はない」

つてことは……

密会してプレゼント渡す気か！？

「何しているんだ？早く行かないと集合時間に遅れるぞ？」

「わかつてゐるわよ！..」

「何怒つてんだ桜？」

「怒つてない！..」

今日はこの2人から目が離せそうにないな

「では今日も楽しんできてくれさい。出店で買った食べ物のゴミは
ちゃんとゴミ箱に捨ててください。では解散」

担任がさつ言い終わると教室のあちこちでは

「どこの行く？」

「一緒に行動しない？」

なんて声が飛び交っている

「俺らはまださつある？」

5人に質問する

え？

闇魔大魔王がめつちゃ一ニヤケるやん！

「中庭に行くわよ

はい？

「「「「何があるんですか？」」」

「行けばわかるよ」

「ケン何か知つているな！？」

「行くわよ。」

そんな風に睨まれたら

「「「「行かせていただきまわ」」」

イヤとは言えないんだつてば（泣）

「せりー早く

「「「「はこー。」」」

第32話（前書き）

遂に読者数が一万人を突破しました＼（^_^）／ 本当にありがとうございます（^人^） つきましては感想や評価お願い申しあげます（^ー^）

第32話

「只今より第8回光輝学園文化祭を開始いたします」

「こんなモノのために来たのか?」

「校長の話なんぞ聞きたくもないわ!
聞くだけ無駄だ」

「違うわよ……ほら始まるわよ」

「何が始まるんだ?」

「今から光輝学園ベストカップルを決めます! 参加者はステージ裏の教室に集まって下さい! …!」

「うわー!…

「コレ見に来たのかよ?!

「てかどんな奴等がこんなのに出るんだよ?」

「参加者は名前を呼ばれたら返事して下れ! では名前を呼ばなれせていただきます」

「始まるまで時間かかりそうだよ? 他の所行かない?」

「薰の言つとおりだぜ? 他の」

「1年C組…椎名拓也君と堂本薰さん」

今呼ばれたような……
いやありえん

「椎名拓也君と堂本薰さん? いらっしゃいませんか?」

俺らだ（泣）

「「はい……います」」

「わかりました」

なぜに名前を呼ばれた?

たしか参加を希望する生徒は先生に名乗り出ないといけなかつたを
じや……

俺ら2人共参加希望してないはず

なのになぜ?

など一人で考えていると

「私たち参加希望してないわよーー間違いないのーー?」

桜が叫びだした

「え？ 桜と元希もなの？」

「は？ まさか薰たちも参加希望してないのに名前呼ばれたの？」

「うん」

「次…同じくこの組の真田健太君と瞳さん」

「「はあー」」

「お前等は参加希望してたのか？」

「うんー…やつだよ」

「ついでに言つならアソタ達4人も勝手に参加希望にさせてもいいつたから」

……………なんだつてー…？

「ふざけんなー。」

「酷いよ瞳ー。」

「何で無断でー…しかも相手が元希だなんてー。」

「喧嘩売つてるのか？桜よ」

龍門書局影印

「行へりて云々」

「はあ!? 決まつてるでしょ? ステージ裏の教室」

「いや行かないから！なあ薰」

薦は同意を認めた

「私は出てみたい」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

「マジで言つてんのか!?

「うん……ダメ?」

わかつたからその上目遣い止めとくれ
反則だ

「わかった……出てやるよ。桜まだつる？元希といでののか？」

「俺はかまわん」

「はあ？ アンタプレゼント渡す好きな子に見られたらヤバいんじゃ
ないの？」

確かにヤバいのでは…？

「かまわん。大丈夫だ」

その根拠は？

いや自信はアコから出でてるのありますか？

「じゃ～早く行きましょ」

「え～では男子は右端の教室に。女子は左端の教室に入つて下さい
「また後でな

「うん」薰たちと別れて指示のあつた教室へ向かった

「はあ～……

そんな隣で溜息つくなよ

「元希……どうしたんだ？」

俺を見てまた溜息をつき話し始めた

「俺が退院した日から桜が変だ。日が合つとすぐに逸らし、あまり話してもこない。今日も此処まで無言に近い状態のままで来た……やつと話したと想いやすぐ喧嘩……俺何かしたか？」

「じてなこと思つ

「僕もそう思つよ

俺らその原因知つてますけどね

「だよな

『ガラガラ』

「ではお入り下さい

『カシヤ』
「はい。いいですよ

「『ありがとうございます』

記念撮影が終わり教室を出た

「しかし何でタキシードとウエディングドレスなんだ」

オカシいだろ?
しかも参加者全員

「結婚式みたいだね」

「そうだな……」

結婚……か

俺は薫と結婚するのだろうか?

つてまだ結婚はまだ早いな

「タクちゃん……どう?似合つてる?」

うん

「似合つてる」

「ホントに……? ありがとつ

途端に薫は眩しいくらいの笑顔になつた

「ホント…可愛いよ」

そう言いながら俺の顔は薰に近づいた…

キスをした

顔を離すと薰は

えへへ

と笑いながら俺の腕に自分の腕を絡めてきた

「ステージに行こー！」

ホント薰といふと楽しい気分になる

「あいよ」

俺らはステージに向かつた

「それでは投票の結果を発表したいと思いますーーー！」

今ステージにいるんだけど……
ギャラリーあすぎだろーーー？

軽く200人はいるぞーーー？

「タクちゃん……緊張してたやつだった」

薰の手が震えてる

俺は薰の手を握る

「落ち着け……」

震えが止まつた

「うん……タクちゃんの手……やつぱつ温かい」

「ほり……結果がでるぞ」

薰がつないでる手を、ギュッ！と少し力強く握つてきた

「今年はすごい結果になりました！まず第3位は……1年の組元希君、
桜さんの2人です！――」

観客がキヤーキヤーと騒ぎ出した

てか……

マジですか！？

「うん？」

「マジかよ

本人達も驚いてるしね

「続きまして第2位は…同じくC組の健太君、瞳さんです…」

ええ…?

これは予想外だ

「あの2人が1位だと思ったのに…」

「俺もそう思ってた」

だから驚いた

今ステージにいる人たちを見てみる……

どう見てもコイツ等が1位にしか思えない

「惜しかったね瞳」

「まあ1位にはなれないってわかつてたけどね」

うそ…?

マジで…?

「そうだね」

え…?

お前もなのか！

「誰なんだ1位は?
誰なんだ!?

「そして栄えある第1位は.....」

「1位は!??」

次に発せられた言葉に我が耳を疑つた

「回じくし組の拓也君と薰さんです!...拍手!...」

は は
あ ？
！ ？

「タクちゃん……夢かな」

「夢だな」

拍手がパチパチとなり、観客がワーウー騒いでいる中

俺らは信じられずただ突っ立っていた

「キレイだね……」

「ああ」

夜に学校の屋上で壁を見るなんて滅多にないだらう

「でもビックした……1位でしかも賞品が「ノムソソレだなんてな」

今自分たちの着ている衣服を交互に指差す

「これで結婚式で着るドレスが決まったね」

「おーおー……」

「タクちゃん……大好き」

「俺もだよ」

優しいキスをする

「薰……少し目を瞑つて」 薰は素直に言われたとおつこする

用意したプレゼントをポケットから出した

「田を開けていいよ」

田を開けた

と同時にプレゼントを渡す

「メリークリスマス…ほらプレゼント」

『喜んでくれるだらうか』と不安だつたせいか少し緊張した

「あけても良い?」

「OK」

箱の中から例の指輪が姿を現した

「可愛い……ありがとう……」薰の見せた笑顔が俺の不安を吹き飛ばした

この笑顔のためなら何でもできる……そう思えた

「タクちやん……」

少し顔が赤くなっている

薰の田を見れば言いたいことがわかつた

薰の手にある指輪を取り薰の左手の薬指にはめる

「なんでわかったの？」

俺はそんな質問に普通に「うつ答える

「田を見ればわかる……だって俺は薫の彼氏だぜ？」

前に薫が病院の屋上で言ったことを真似てみた

「わうだね。ありがとう！」

そしてまた…キスをする

「薫…わつき『大好き』って俺に言つたよな？」

「うん」

「俺は違う…いや違つた」

「え？…どうして？」

薫の表情から戸惑つているのがわかる

「大好きのわざに上かな？……俺は薫を愛している……そして一生
愛する」

「それってプロポーズ？」

「かもなつて泣くなよ……」

「ひつぐ……だって……嬉しいんだも

ん……」

薰の叫び声が「ダマする

「わかつたから泣きやめつて」

《ガチャ》

「タク。パーティー終わ……」

ナイスタイミングだなケン（泣）

「拓也？はや……なに薰泣かしてんの？ハツ！？まさか薰を襲つたん
じや……」

汚物を見るような目で見ないでくれ

てか襲つてねえし

「襲われたの……」

ええ

ー？

裏切り！？

古風的な言い方だと……謀反？

「タク……が……」

「襲つ……た？」

やめて……

そんな田で見ないで！

「冗談だよーホントはプロポーズされたの」

なんでスグに言つかな？

しかも超幸せオーラを出しながら

「マジ？ーーー」

「マジだよ」

オーラ全快だな

「ブ、プロポーズつて言つてもアレだーー『薰を一生愛する』つて
言つただけだーーー」

恥ず！

「そんなこと言われたのー？それは幸せオーラ全快になるわね」

「タク頑張れ」

恥ずかしい……

生きてきた中で1位、2位のどちらかだな……

「アハハハ！タク顔真つ赤だよ？」

「ホントだ！アハハ！！」

笑うな…（怒）

「タクちゃん…」

名前を呼ばれた方向に顔を向ける

《チユ》

薰さん……

なんで「コイツ等の前でキスをするんですか？！」（泣）

「これプロポーズの返事」

「どうせ……」

「はあ…笑い疲れた」

笑いすぎだつてえの！

「もうほらしつかりしてよ！拓也！ほらアンタ等私服！パーティー終わってんだから帰るわよ！！」

「元希と桜がいない」

「此処で待つまつて言つたの...」

現在玄関前

「捜すか...」

「さうね...じゃ健太行くわよ」

「うん あー見つけたら電話するね」

「へいじく

「タクちゃん行こー」

差し出してきた手を握る

「ああ

捜し始めて5秒経過
ケンから電話が

「もしもし?見つかったのか?」

まだ5秒しか経ってないぞ!

『体育館裏に急いできてー』

まさか.....修羅場?

まさかね

「どうしたの？」

「体育館裏に行くぞ」

「はい？」

「なんなの?」なんとか連れてきて

「ゆづくつ話がしたくて此処に連れてきた。だつてお前最近変だから」

確かに変だと思われても仕方がない
元希にたいする気持ちに気づいてからはずドキドキして田舎で会わせれない、話もできない状態になっているのだから……

「別に普通よ! それより早くプレゼント渡しに行かなくていいの?
みんな帰り始めてるわよ」

行つてほしくないけど仕方ないよね……

「はあ……ほら」

「え?」

元希が何かを投げてきた

『パサ』

キヤッちした私は驚いた

「うふ……」「れ好きな子に渡すんじゃなかつたのー。」

そつ……

投げられたモノは前に病室で見たプレゼント入りの袋だった

「わうだナビ?」

「『わうだナビ?』じゃなー! 何で私に投げつけるのよー。」

「だ・か・ら! 好きな子に渡すプレゼントだつて言つてんじやんか
よ」

「だ・か・ら! 何で私に渡すのかつて言つてんのー。」

意味が分からないつてえの!!

ああ~イライラする~

「いこ加減わかれよ……」

「なこをよーー。」

なこをわかれいつのよー?~

「俺の好きな人つてこつのはお前のことだ。だからプレゼント渡しざよ」

「はー?」

思考停止.....

「あーーーもーーーーだから俺はお前.....桜が好きなんだよーーー」

「ええーーーーーーーー!」

「うわ?ー!」

「冗談じゃなくて!ー?」

「嘘でも[冗談でもない]....まあお前は拓也が好きなんだひつねじ.....

「プレゼントは受け取」

「私は元希に抱きついた

「私も元希が好き.....」

耳元で囁く

「はあ？お前拓也が好きなんじゃなかつたのか？」

「違う…元希が好きなの…！」

「なんで？」

「なんでつて…」

「実は…」

好きだと気づいた時のことを話している間元希は私をギュッ…と抱きしめてしてくれた

「ようは自分相手に嫉妬してたのか？お前バカだな」

「バカつてなによ…？だいたいアンタはい」

「幼稚園から」

心読むのやめてくれない？

つて

「そんな前から？」

「うん…桜…今から起つて出来事に驚くなよ」

向のじつちや

「そこの4人！！でてこい！」

は？

「はあい」

「この声は！？」

「見ちゃつた

「いや驚いたわよ」

「まさか元希の好きな人が桜だつたとはね」

「おのでど」

「いつからいたの？」

「 「 「 「 初めから 「 「 「 「

……
ありえない

「桜なにもらつたの？見せて！」

「かわいいええぱ…………ピアス」

かわいい……

「かわいいじゃないー元希やるわね

瞳冷やかしすゞ

あーお礼言わなきやー！

「元希……ありがとう」

あれ？

元希の顔が赤くなつた

「あ～れ～？もしかして照れてるのかな？」

ケンもからかうすぎー！

「ケン、ひるとい」

す「」に殺氣が……

「歸るつか？」

逃げたな……ケン

「賛成だな。薰」

「はあい」

拓也と薫は仲良く手をつないで歩き始めた
例のアノ格好のままで

「健太私たちも」

「はいはい」

瞳達も……

いいなあ……

不意に元希が私の手をつかみ歩き出した

「え? ちょっと元希? ?」

「羨ましそうに見てたからな」

「キドキするから」きなりは止めてほしー……

「元希……」

「なんだよ?」

「大好き……」

「俺もだよ」

久しぶりに元希の笑顔を見た

嬉しくて今日は疲れそうにない

《ルルルン》

携帯のアラームを止めようと手を伸ばす……

何か柔らかいモノが……

「……俺の部屋でベッドのまゝ……

恐る恐る扉を開ける

「うん

「……」

叫び声を上げず、下に落ちないように頑張りました

だつて母さんとお別れ（なぜか親父も…）かもしれないから（

泣）

前回と同じく薫が扉の前（布団の中に潜りこんでます）にいる
言つておぐが何もやうじことせしていないからな！

まあアームを止めて……

しばしば寝顔を観察

..... o

抱きしめたい！

いやダメだ！

「 プッフ 」

今笑つたよな？

お前120%起きてるだろ？」

- 1 -

寝た二、三時間後、

フツフツフ……

静かに手を伸ばし
グイ！ つと薫を抱き寄せる

「キヤーー。」

「せひ起きてさんじさん」

皿が皿

「おはよう」

「『おはよう』じゃなー…悪戯はさせただろうが」

「あれよつけ皿…じゃなくて置き手紙です」

それよつけ
わづ…こ…
せき…こ…

紙を受け取り読み始める（手は薰の背中に手を回してこむ）

「えーと『おはよう拓也

今日から週間私たちは薰ちゃんのいのち親のもとに遊びに行きます

生活に必要なお金はテーブルの上の蜜柑を入れてこむ籠に入っている
ことでしょう

では行つてきます

「…」

「びっくりした？ これ朝の2時に見つけてすぐに叔母さん達の部屋に行つたらもう居なかつたよ」

なぬ！？

朝から疲れる
しかも2週間かよ！

一起やるか……？」

薰から手を離そうとするが逆に抱きついてきた

外
一

外がどうしたんだ？

「ぐらー！ 今何時だー！？」

携帯に目をやる

2時8分

「起」しても起きないからアラームを早めたの「

.....。

早めたレベルじゃない！

וְעַל!

強烈に睡魔が……

「寝直すから薰は早く部屋に戻れ」

「いや……」そのまま一緒に寝る

そういうて俺の胸あたりに顔を埋める

嬉しいよ?

嬉しいけどや……

ドキドキして寝れないって……

「お前何……言つ……てん……だよ」

前言撤回

今なら寝れる

「スウ……。」

寝たのかよ！？
はやくない？？

つて俺もそりそろヤバい……

結局薰と抱き合つた状態ままで眠りについた

「起……今何時……」薰起きる。「

「もう少し……」フーザーフーザ……

「起きるつて……」

薰の体を揺らす

「もう一どうしたの?」

まだ眠いのか体は起つてこないので田は開いていない

「もう8時なんだよ……」

「……何時に空港集合だっけ?」

「8時40分だ……」

薰の田が一瞬にして開かれた

「急いで用意する……」

「はー……」

さて諸君……

なぜ我々が急いでいるのかといつと今日が12月31日だからです

遅刻したら瞳が怖い！！

だから慌てるのさ……

第36話（前書き）

更新遅れています。せん^（ーー）^

「眠い……」

飛行機は寝て過ごした
なぜなら疲れたからさ…

「タクは大事な日にかぎって遅刻、ギリギリだよね」

笑うな！

笑い事ではすまない出来事なんだよ！－

「朝に家から空港まで全力でチャリを漕ぐ者の気持ちが分かるか？
しかも2人乗りだ……さつき寝たけどまだ疲れとれない」

旅行初日からだい

「迎えの車が来たわよ」

瞳の指さす方向を見てケン以外の全員が固まる

「はやく乗つて」

乗つてつて……

お前これ

「リムジン?」

迎えの車がリムジン? !
あり得ないって!
それにしても長いな……

運転席から中年の優しき顔をした人が降りてきた

「お久しぶりです瞳お嬢様。」

お嬢様?

瞳が??

この閻魔大王が??

「久しぶりね。草野さん」

「荷物はすでに別の車が運んでおります。どうぞ皆様お乗りください」

「し、失礼いたす」

緊張しそぎだ薰!
喋り方が変だぞ!

「ほら拓也早く乗つて!」

気づけば乗つていないのは俺だけになっていた

「はいはい」

リムジンに乗り2時間で瞳の……瞳の別荘についた

まず一言

「デカい……

「荷物はすでに部屋の中にはあります。ではまた明後日に来ます」

草野さんは最後に「よござん年を」と言つて去つてこつた

「どうあえず……はい」

瞳がこじりひびき何かを差し出す

「鍵?」

「やつよ? 拓也」と薰の部屋の鍵

今サラリととんでもないことと言わなかつた?
念のため確認を

「誰の部屋の鍵だつて?」

「拓也と薰の部屋の鍵」

沈黙

薰を見ると顔が真っ赤になつていた

「はい。元希と桜」

「え…うん」

桜も顔が赤い

元希も……

じゃなくて

「なんで男と女じゃないんだよ？！」

瞳は

はあ？

とでも言いたそうな顔をする

いやいや俺は間違つたことは言つてないぞ？

「別にヤマシイ気持ちがないなら大丈夫でしょう？」

「いややうこいつ問題じやなくて…」

ついつい声が大きくなる

「寒いんだから中にはいるわよ」

無視ですか？

「賛成」

ケンはここのこと知つてたな

寒いのでとにかく俺も中に入らつ

「…………。」

薰と2人で部屋にいるのだが……

なんか……ね

気まずい

沈黙してからすでに10分経過

俺なのか？

先に話さないといけないのは俺なのか？

「「あの～」」

タイミングわるう〜

「先に言いな

「「ううん……タクちゃんが先に言つて

そつか……

では言わせてもらひおつ

「手袋ありがとな。すゞぐ暖かくて助かるよ」

前に俺だけ部屋に入るときノックしなければならない時期があった

そのとき薫は俺へのクリスマスプレゼントの手袋を作つていってくれていたのだ

「えへへ 気にいってくれて良かつた

「ううん気にいつた。今まで貰つたプレゼントの中でス。・イだ

言つ終わると同時に薫が抱きついてきた

やつぱりコイツが抱きつくのは癖だな

「タクちゃん……その…………なんでもない

声が震えている

「何でもないワケないだろ?」

「今度話すよ

「 3 … 2 … 1 …」

テレビの同僚者とゲストが声を張り出している

そして俺等も声を合わせる

「 　　HAPPY NEW YEAR 」 」 」 」

皆言ひ終わると隣にいる恋人とキスをする

テレビを見ながら話をしているとすでに時計は午前2時を回っていた

「 薫眠いだろ? 」

「 眠…く…ない」

「 はこじや俺等もつ部屋に戻るわ… おやすみ」

「 　　おやすみ 」 」

眠りかけの薰を背負い部屋を田指す

ドアを開け中に入りドアを閉め薰をベッドに置きまたドアを開ける

やはり4人がドアの前にいた

「散れ……」

「眠……」

そつぬきながりもつーつのベッドに寝ねべる

「タクナカニ……」

「なんだ？起きてたのか？」

「起きてたよ……でその……」

「何だ？ほりつけられ」

眠いから早く言え

薰は立ち上がり俺のベッドの前にきた

「一緒に寝ちやだめ？」

「…………はあ？！そんなの

やめろ！

そんな潤んだ目で俺を見るな！！

わかつたから……

「いいぞ」

薰は笑顔になり布団にはいってぐる

「おやすみタクちゃん」

《チユ》

「おやすみ……」

俺絶対顔赤いな

今朝と同じような状態で幸せそうな顔をしながら2人は寝むりについた

朝起きると一緒に寝ていたはずの薫は居なくなっていた

「タクちゃんおはよっ」

珍しく朝から元気だな……

「おはよっここいつの間にか俺の背中に回ったんだ?」

明らかに寝たときの位置が変わっている

「起きたら変わったよ」

俺の寝相が悪いのか……

それとも薫の寝相が悪いのか……

間違いなく後者だな

「下に行くか

立ち上がり背伸びをする

まだ少し眠い……

「うん……タクちゃん

「なん」

最後まで言い終わる前に薫の唇が俺の唇に重なった

「えへへ。おはようのキスするの夢だったんだよね」

「ややややうか」

眠気はどうとかへ飛んでいった

下に降りるとすでに起きていた

1人ニヤツいている…

まあ誰と言わなくともわかると思つが念のために言おひ……

閻魔大王……と

「なに朝からニヤツいてんだよ?」

予想はできている

どうせ薫とほにやほにやしたのか聞く気だろ?

そんなことは昨日の時点でもわかつていのんだよー

フツ
さあ聞くがいい!—

すでに反論するための言葉は考えてある

「拓也」

れぬ！」

- 18 -

間抜けな声を出しちゃった

「これがどうしたの?」

薰の話、ひょいと口にがさりしたんだ？

「電源入れてみて」

- 1 -

言われたとおりに電源を入れる

○

「な？！」

デジカメの画面から瞳に視線を移すと鍵の束をこちらに見せびらかしていた

「いや～抱き合ひながら寝るてことは思わなかつたわ。記念に一枚撮らせてもらつたから」

「頭きた……」

.....。

10分後

立場は逆転していた
それもそのはず
こんな時のためをと思い瞳の恥ずかしい画像を携帯に納めていたの
だから

「すいませんでした……」

「もうつ2度とするな

「……はー」

この後は俺と瞳は条約を結び平和的に解決した

「では行くわよ?」

誰もが『ドコに?』と言つたかった

ただ瞳の眼がそう言わさせてくれなかつた……

別荘の使用人が運転する車に乗り目的地に向かつた

「どこに行くんだ?」

移動中の車内で目的地を知っているであろうケンに質問する

だがケンは首を横に振り苦笑する

「今回は僕も知らないんだ。聞いても教えてくれなかつた」

ため息をつきながら外に目を向ける
天気は快晴で雲一つ見あたらなかつた

「つきました」

運転手の言葉と同時に車が止まる
そして車から降りた俺ら幼馴染3人が
『ピシシ』
という効果音があうような感じに固まる

到着した場所はある有名な動物園だった
べつに固まつたのはその動物園が有名だからではなく動物園といつ
ことに問題があつた

「おい…何固まつている?」

もう一つの車から降りてきた元希が怪訝そうな顔つきで立ってくる

「いや～……ね」

ケンが困ったような笑顔で俺を見てくる

わかりましたよ
俺が言いますよ

「ちょっと一回まってないで早く中に行くわよ?」

説明するから待ってくれ

「実はその……」

「ハツツツキリと言ひなさいよー」

瞳の叫び声に回りの観客はこちらを振り返るが瞳から発せられる威
圧感に見て見ぬ振りをしそのばを逃げるよう而去つていった
桜と元希は他人のフリをしてる
薄情な奴らめ……

「はあ……実はコイツが生き物全般がダメなんだ」

俺の右手に絡まっている薰を指差す

「「「え!?」」

これは予想外と言わんばかりの顔をする他3人

「「」めん……」

絡めている腕にさらりと力を入れて締め付けてくる

痛いから……

とてつもなく痛いからね（泣）

「どうする？..」

「桜の言つとおつじつする？」

他人のフリをやめたと思いきや尋問かこの野郎共
でもどうすっかな？
つてコレしかないよな

「4人で行つてきたな。その間俺らは観光でもしてゐからさ

場の空氣を和らげようと笑顔で言つてみた

「わかつた。じゃ見終わつたらで連絡入れるからすぐここに帰つ
てきてよ？」

「了解！薰行くぞ」

体を反転させ横断歩道渡り……

観光スタート！

「どう行くの？」

はい全くその通りですね
周りに何があるかわからないし……困ったね

……………ん?

聞こえた

微かにだけど……

『ザ…ザアー』

「 「…」」

薰も気づいたらじく微笑んでいる

「行くぞ」

「うん！」

薰の手を引っ張って走り出す

隣には大切な人がいる
ただそれだけでも幸せだ
自然と微笑む
それは薰も同じで……

俺は薰と一緒に居るとよく「こんなふうに想つ

「までも走つていけそつな……」

飛んでいけそうな……

そんな想いに……

しかし今回その想いは

『ズキン』

「つ……！」

痛みによつて消された

立ち止まり膝を凝視する

ヤバい……

最近無理してたりしてたからか?

それとも寒さのためか?

膝が痛い……

「タクちゃん?」

異変に気づいたのか不安な顔つきになつてゐる

「大丈夫。少し休めば……」

治ると言おつとした
途中で止め指さす

「あ…………」

薰の目が輝き始める

「海だあ！」

嬉しそうに声を上げ笑う
明るく優しい愛する人

「行ひ」

痛みなど忘れ手をしつかりと繋ぎ歩き出す

「海だねえ……」

「海ですねえ……」

膝の痛みが悪化してはいけないという薰の考えで砂浜に行くためにある階段に座り休憩中

「タクちゃんは覚えてる? 私たちはまだ小学生で親たちと海へ来たときのこと」

「覚えてる」

「たしか……」

「私が溺れたんだよね」

「うん

」

「あれは焦ったな。少し離れたところ薰が泳いでると思つたら波に飲まれて消えたんだから」

薰はこちらをみて苦笑する

すぐに視線を海に戻す

俺も視線を海へ戻した

「あの時ね……私は死ぬんだ……嫌だな……死ぬのは怖いなって思ったんだ。でも水中で暖かい手が私の手を掴んで海面まで引っ張ってくれたんだよね」

今度は「――」と笑いながら「ひひひ」を見てくる

「今もそうだけあの時私を助けてくれた拓也は特別格好良かったよ」

「サンキュー……」

嬉しいよつの恥ずかしいよな感じだ

……。

ちよつとまで

「今なんて言った?」

聞き間違えじゃないよな?

「特別格好良かつたって……」

顔の温度が急上昇

じやなくて!

「その前!俺のことなんて呼んだ?」

薰は顔を赤くして固まる

どうやら聞き間違えではなさそうだ

薫は立ち上がり砂浜に向かって歩き始める

海と階段の半分まで行つたところで体をじろりに向ける

「私は小さい頃から『タクちゃん』って呼んでた！でもね……でもね！私はちゃんと貴方のことを……『拓也』って名前で呼びたいの……」

顔を真っ赤にしながらも自分の思いを呟んでくる
そして座っている俺の前まで歩いてきて立ち止まる

「ダメかな？」

俺は横に首を振る

「ダメなんてことない。むしろ俺はそっちの方が嬉しいよ

薫の頭を手でポンポンと軽くたたく

「ありがとう

幸せオーラ全開で微笑んでくる

あの後2人で海を眺めながら過去を振り返った

幼馴染み3人で毎日一緒に学校に行つてたこと

帰つていたこと

遊んだこと

小学校卒業と共に薫の引っ越しに3人が涙を流しながら別れた

中学校で膝に怪我をし絶望する

そして薫との再会

喧嘩したけど最後は仲直り

薫は俺の心の傷を治しました再会したときの約束をしアメリカに帰る

そして去年薫は俺のクラスに転入し1日目に事件を起こす
トドメには一緒に住むことになつっていた

その後も色々あつた

ケンたちが俺の背中を押してくれたおかげで恋人同士になつた

クリスマスパーティーではベストカップル校内第1位に選ばれた

どんなことを思い出しても薫はいつも俺の傍にいたような気がする

『ピリリリ』

携帯が鳴る

画面を見ると瞳からだつた

「もしもし?」

『今から外に出るから戻つてきへ』

「わかつた」

電話を切りポケットにしまつ

薫は俺に手を差し出してくる

「拓也みんなのとこに帰るひーー。」

「ああ」

差し出された手を握りもとの場所へ戻ることにした
歩くこと数分たつた時に冷たい白いものが空から降つてきた

「雪だ」

そう言って立ち止まり微笑む薫はまるで天使だつた
左手にはプレゼントした指輪がつけてあつた

「薫」

「なに?」

「愛してゐる」

「私もだよ」

そつと唇を重ねる

再び歩きだし待ち合わせ場所の前にある横断歩道まできたとき俺は
薫の手が赤くなっていたことに気づいた
だから後ろにある自動販売機でホットコーヒーをカイロ代わりに買
うことにした

ちゅうじで信号は青だった

「薫先に行つてみ。コーヒー買つてくるから」

「うんわかった」

握っていた手を離し薫は周りにいる大勢の人たちと向こう側へ歩き
出した

「わつわと買つべ」

後ろを向き自動販売機にお金を入れコーヒーを2つ買つ
再び振り返ると信号は赤になっていた
向こうでは薫はみんなと合流しこちらに手を振つて
軽く手を振り返し信号が青になるのを待つ

チラリと横を見ると少し離れたところにバスケットボールをもつた
小学3年生くらいの男の子が母親の後ろを歩いていた
男の子の隣には同じくらいの年の女の子がいた
昔の自分たちに重なりつい微笑んでしまった

不意に男の子がボールを落とし拾おうと道路に飛び出した
横からはスピードのでている車が迫つて
持つていた缶を投げ出して男の子めがけ走り出した

「危ない！！」

後ろで女の子が叫ぶ

そして……

第40話（前書き）

今日からまた更新を再開してこまます（*ー*）

『ガシャンー』

今見ている光景が現実でないよつに思えた
でもこれは現実だ

前に見た悪夢が現実となつた

私の目の前で大切な人が車に…

「拓也！」

走つて倒れている拓也の傍に行き名前を呼ぶ

「タク！つ元希救急車呼んで！…瞳と桜はそこにいて…」

隣にきたケンちゃんが指示をだす

「わわかつた！」

いつもは冷静沈着の元希が慌ててている

「親父！？僕だけど拓也が車にひかれて！脈？！まだある…！…それ
で…」

ケンちゃんはおじさんに電話をしている

「拓也！…聞こえる…？」

「…か…おる」

手を握ると微かに握り返してきた

「おおきな世界」

横に皿をやる。駅の子には怪我はなく立ち上がりて母親に抱きつかれている

「無事だよ」

私は堪えきれず涙を流してしまった

「よかつた」

力なく微笑むと握っていた手から力が抜けた

「たゞか？」

.....

返事がない
うそ
いやだ

「嫌あああ！拓也？！田を開けてよ！拓也！－！」

「タクつ……脈はまだある……つ……」

手首に手を当てていたケンちゃんの目が大きく開かれる

手が震えている

「頭を…打つて…いる」

「…………。」

田の前には『手術中』の文字が光っている

誰もが口を開かずにただ静寂が私達を支配していた

拓也が運ばれてからすでにもう4時間が経った

ケンちゃんの情報のおかげで早く措置ができると言っていたの…

もう4時間…

「…………」

ランプが消えみんなが立ち上がる
扉が開き医者が1人現れた

「拓也は?！」

私は叫ばずにいられなかつた
大切な人がこの世からいなくなるなんて考えただけで身が引き裂か
れるような想いになる

「大丈夫ですよ。命に対する心配はありません」

そう言つた後に医者から微笑みが消え深刻そうな顔つきになつた

「ただ頭を打つてはいるためいつ目を覚ますかわかりません。最悪の
場合一生目が開かれることがないことも……」

私は目の前が真つ暗になつた

目を開くと白い天井が見えた
もしかしてさつきのはすべて夢?

「薰?」

「瞳…桜…」

横に目をやると目が真つ赤になつてはいる瞳と桜がいた
その光景を見てやはり事故は現実に起きていたんだとわかつた

「拓也は?」

「薰の隣のベッドで眠っているわ」

逆方向に体を向けると眠っている拓也がいた

「拓也……」

ベッドから立ち上がり横のイスに腰を下ろし手を握る
手からはこつものように温もりを感じられた

「瞳……」

「…………」

2人は病室を出て行くと代わりにケンちゃんが入ってきた

「わっしき叔父さんたちに電話してきたよ。明日には帰つてくれるつ
て」

「やひ……」

頭を撫でる

「拓也……」

名前えを呼んでも反応がない

拓也……

貴方はどうしたら田を覚ますの？

笑ってくれるの？

手を握ってくれるの？

キスしてくれるの？

また涙が流れ
た

拓也はそのまま田田を覚ます」とはなかつた
翌日の昼前に叔父さん達が帰国した
ついでに私の両親もやつてきた

「拓也……」

何度も名前を呼んだだるい?

「薰。これ買つてきたから食べなよ」

ケンちゃんはコンビニの袋をベッドの横の机に置く
でも食欲はない

「じゃ僕は戻るよ……」

そう言つたケンちゃんの田を見て直ぐに私は眠れなかつたんだとい
うことが分かつた

ケンちゃんが出て行つた5分後に叔父さん達が入つてきた

「拓也……」

おまさんからはじつもの明るさが消えていた

「早く田を覚ましてほしいな……」

叔父さんからも暗い感じがする

私は一日中手を握り名前を呼んでいた

まるで機械のように……

「…………」

気がつくと周りには何もなく、真っ暗な闇だった

「あれ？ おかしいな……」

記憶をリピートしてみよう

確か……

男の子が飛び出して……

俺が庇つて

車にひかれた？
つてことは……

俺は死んだ？

いやいやいや……

などと一人考えていると何やら宙に浮かぶ丸い光が目に留まった

何だこれ？

電球……じゃないな

ゆっくりと手を伸ばす

光に触れた途端に記憶が舞い戻る

『私も好き』

想いを告げてくれる薰

『タクちやん約束……』

涙田で俺と約束を交わしている薰

『ありがと』

嬉しげに微笑む薰

『拓也つて呼びたいのー』

俺の名前で呼ぶ薰

薰……

会いたい……

薰に無性に会いたくなつた

会いたくてたまらない……

そう思つたときだつた……

左手に温もりを感じる……

何もないのに……
でもこの温もりは……

「薰……」

なんだろ……
頭に何かが当たっている
いや違う

撫でられている……

まさか……

ううんきっとそう

この優しい撫でかたはをするのはこの世に1人だけ……

目をゆつくりと開くと視界に月を眺める愛しい人がいた

「た　く　や？」

声に気づき視線を私に向けてきた
綺麗な澄んだ瞳が私をとらえた

「」めんな　薰「

微笑むその顔が……

優しい声が……

握り返す温もりのあるこの手が……
すべて愛しかつた

「私　ね　寂し　か　つたん　だよ」

「「」めん

優しく私を抱きしめる

でも私の目からは次々と涙があふれ流れる

「怖：か：つたんだ：よ？もし：拓也が」

「俺は死ない。前に約束したから」

ギュッと強く抱きしめてくる

「うわあああん！」

私の泣き声は廊下まで響いた

「泣くなよ…」

私は拓也の腕の中で泣き続けた

悲しいのか嬉しいのか分からぬが泣き続けた

次の日の朝はこの病室だけ大騒ぎだった。瞳と桜は俺の動く姿を確認すると泣き出し、ケンと元希は無事を喜び騒いでいた。みんなが俺のことをしていても大切に思つてくれていて、嬉しく思い少し涙が流れた。

「拓也ー。」

入口から高速スピードで移動し俺に抱きついた母さんに一言申ししたい。その行動は一般的に抱きしめるじやなくてタックルと呼ばれているのだと

「ゲホゴホ……親父は？」

薰の話によると親父もいるはずだか……

「あー……ひょっとね」

母さんが言葉を濁したといつひとは……

親父の身に何かあつたのだろう
例え……

俺が目を覚ましたことに喜び勢いで親父をボコボコに……あり得ないこともない

「薰ちゃんの、両親と話してゐるのよ」

「うわー……

俺の推理とは全然違うパターンできたか

なんか敗北感が……

「あ～じゃ僕たち4人は帰りますね」

「え？ ちょっと健太？？」

瞳はケンにズルズルと引き面れていった

「また明日来るから」

「安静にな」

2人は苦笑しながらケン達を追つて帰つていった

「じゃ～母さんも帰るわね。後で父さんと薰ちゃんと薰ちゃんの両親が来るから」

なぜか悪戯な笑みを浮かべながら母さんが病室から去つていった
その間ぞつとして鳥肌が立つた

しばらく病室の窓から外を眺めていた
雪が降り寒そうだった

『コンコン』

ノックの音が聞こえた

「開いてる」

たぶん親父達だろう

だがまたしても俺の推理ははずれた
病室に入ってきたのは男の子だった
すぐに母親と女の子が入ってきた

……だれ？

「すいませんでした！」

母親は頭が地面にめり込みそうな勢いで頭を下げてきた
てか何か謝れるようなことは……ある
男の子をよく見ると俺が助けた子だった

「頭を上げてください」

なるべく優しく、穏やかな声を出す

「……はい」

少し間はあつたが顔を上げてくれた
と同時に男の子が俺の近くまで歩み寄ってきた

「あいがとうございました」

「……」

すると女の子が男の子の隣まできて

「……」

「ありがとうございました」

と同じく礼を述べ御辞儀する

「どういたしまして」

笑顔でこたえる

「君たち名前は？」

「火野螢です。小学2年生です。趣味はバスケです」

丁寧に学年と趣味まで公表してくれました
趣味がバスケとは…

良い趣味してますね（笑）

「下田奈緒といいます。学年は螢と一緒にです。趣味は読書です」

アンタ本当に小学生？

なんか大人だね…

「火野和子主婦です。年齢は言いたくありません。趣味は息子と同じバスケよ」

誰もアンタには聞いてねえよ
しかも趣味一緒かよ！
だいたい年秘密つて…

《「ンンンン」》

再びノックの音がした

今度は間違いなく親父達だらう

「どうぞ」

《ガラガラ》

久しぶりに親父登場

続いて薫とその両親が入ってきた

薫は俺と目が合つなりニコッと笑つてきたので笑いがえした

ん?

よく見ると親父の頬が一部色が変だ

「拓也……」

親父の目には多少涙が……

だが親父よ……

感動の御対面に悪いが言わせてくれ

「右頬が変色しているのはなぜだ?」

涙が消え去り体が震えだした

「母……聞くな」

「じつやら俺の推理は当たつていたようだ
明らかに今『母さん』とおひそとしたからな

「私達は今日は帰ります。また明日お伺いします」

「お兄ちゃんバイバイ！」

元気よく声を出し奈緒ちゃんこひつぜられ出て行った

「タク君大丈夫か？」

相変わらず人のことを心配しているように見えない

「大丈夫ですよ茂さん」

「はいこれ。アメリカのお土産」

「早紀さんありがとうございます」

お土産を受け取り、ひとまず机の上に置く

「母さんが言ってたけど話って何？」

俺の発言に薰は俯く

「実は私達が日本に帰ってきたのはあなたに話があるからなのよ

話ね……

たぶん俺と薰が付き合つてることについてだらう

「君と薫が付き合っていることについては君の御両親から聞いている。ただ……」

「ただ？」

「何が言いたいんだ？」

ハツ！

まさか別れると？！

「ただ……私達の予定に変更があつてアメリカに10年ちかく居なくちゃならなくなつたんだ。それで薫を引き取りに来たんだよ」

「え？」

「これはドッキリですか？」

「いや違う……」

「親父の顔が真剣そのものだ
それに薫の手が震えている

薫の手を握る

「震えは止まったが顔を上げない

「何の冗談ですか？」

「冗談ではない」とは分かっている
だけど認めたくない

「薫が遠くに行ってしまうなビイヤだから……」

「冗談ではない。いたって真剣な話だ」

再び震えだした薫を引っ張り、抱きしめる

「今までのよつに俺の家に居ることはできないんですか？」

「……3日後には薫を連れて帰るつもりだ。もじどつしても嫌だと
言つのなら後でこれを読みなさい」

茂さんから封筒を受け取る

「いつたい」の中の手紙には何が……

「私達はもう帰るわ。あとはお父様と話をなさってください。タク君も聞きたいことがあるでしょ？」

ふふふと微笑みながら薰を連れ帰つていった
薰は出て行く間際に『また明日』と言つてくれた
暫くドアを見ていたが親父に視線をうつす

「親父には聞きたいことがある」

二人とも田は真剣だ

たぶん何を聞いても答えてくれるはず

「何が聞きたい？」

微笑んではいるが硬い表情だ

「うつある。まづこいつ退院できる？」

「明日だ」

即答だつた

てか意外と退院するの早いな…

「次は……」

田を深く瞑り、軽く深呼吸し田を開く

「右足はまだなつてない?」

親父は固まつた

室内の空気も凍りついた
先に口を開いたのはどちらでもなく

「膝の筋肉組織が地面にたたきつけられた衝撃で破壊された」

ケンだった

ケンの登場に2人とも意外にも驚かなかつた
なんとなくいるような気がしたから

「詳しく説明すると難しいから簡潔に話すよ?」

「ああ」

たぶん俺の考えているとおりなら…

「タクは……もう走れないし、飛べない。よつはバスケどいろかス
ポーツはできない」

ケンの言い終わると同時に俯いた

「やつぱりな

俺の言葉に2人は驚愕の表情になつた

「田を覚ました時からわかつてたよ。動かそうにも右足だけが動か
ねえんだからさ。はあ……だいたいそこで立ち聞きしてて気づか
れないとでも思つてはいるのか?薰」

「…………」「

さらに驚愕の表情になつた

「バレてた？」

開かれっぱなしのドアから薫が出てきた
顔はさつきよりも少し青白かった
たぶん今の話は初めて聞いたのだろう

「当たり前だ。なんせ俺はお前の彼氏だからな。なーんてね」
場の空気を和らげるため少しオドケてみる

「ほら他の4人も出てこい」

「まいったな……」

流石にケンは苦笑した
バレない自信があったのだろう
「はあい」

やはり居た

瞳

元希

桜

母さん

の4人が…

「母さんは知つてただろうが……みんな知つてたのか？」

やや間があつて全員が首を縦に動かす

「そりが……薰は？」

「わ、私は……さつさわ」

そう言つてすぐに俯いた
手は自分の服を力強く握り締めている
たぶん泣くのを堪えているのだろう

「親父……最後の質問だ。この手紙の内容を知つてているか？」

「知つているよ」

親父の目は真つ直ぐ俺の目を見ている

「いざれ薰と相談しないといけないこと？」

「そうだ」

ケンの方に視線を向ける

眼にはいつものような優しい、落ち着ける色をしていた

「リハビリの必要は？」

「ある。ヒトツヒツしないと歩けなくなるよ」

「その期間は?」

「半年から一年」

次に瞳に視線を向ける

「あと3日間別荘使えるか?」

「ええ使えるわ。でも3日後から学校よ?」

「わかつてゐる」

もちろん嘘です

知つたかです

ホントは知りませんでした

てゆうか学校始まるの早くねえ?」

「俺と薰だけ」「ひに残るよ。次の日に地元に帰るよ」

「わかつたわ。ぐれぐれも変なことしないでよね?」

「するか!」

「何を言つてか!」

「瞳! からかつちやダメだよ」

「桜と同意見だ」

カツブルらしくなった桜と元希は俺の援護をしてくれた

普段と変わらない態度の4人

はつきり言って嬉しかった

変に気を使わせたり、使つたりされでは嫌だったから

「タクは地元に戻つたらうちの親父が待つてゐるから頑張りなよ」

ケン…

「薰と早くデートできるように頑張りな」

瞳…

「拓也には薰が居るから大丈夫だよ」

桜も…

「頑張れ」

元希も…

みんな心から応援してくれているのが分かつた
なぜかつて？

簡単さ…

こいつ等は俺にとつて大切な人達だから

「あつがとう。俺頑張つてみるよ」

「私達も応援していろわよ」

親父と母とさも…

「あつがとう。全員に悪いんだけビショットと部屋から出でつてくれないか? 薫と話があるから」

「あつがとう。まださつやと回じ態勢だつた

「わかつた。みんな一度部屋から出よ」

「こえ僕達はホントに今日まつ帰つます」

じやあまた明日
と言つてみんな出て行つた

つこで元氣つと親父達も今日まつ帰るひつこ

「薰…」つこおこで

手招きをしながら呼ぶとベッドに腰を下ろした

俺に背を向けて

「…泣くな」

後ろから抱きしめる

薰は俺の手を掴む

「だつて…も…」

わかっている
次に何というか分かっている

「いいんだ。もう…」

「じゃあ…な…んで…泣いて…るの?」

「え?」

薰に言われて気づいた
俺の目からは涙が流れていた

大丈夫だと自分の心に何度も言い続けてきた
そして割り切れたつもりだった
でもダメだった
体は正直だ

薰をやつきより力強く抱きしめる

2人とも声を押し殺して泣いた

泣きやんでから数分たつた
そろそろ本題にはいることにした

「薰は手紙の内容は？」

「知らない…」

「わかった。一緒に読もう」

真剣な眼差しを俺に向けながら頷く
封筒から紙を取り出し読み始める

.....

「「「はあああああー?」」

手紙の内容は俺達を驚かすものだった

「じゅあ明後日は学校で会こましょい」

各自別々に一時期の別れの言葉を述べた

「行つちやつたね……」

「行つちやつたな……」

「私屋食作つてぐるね」

特に焦つている様子もなく薫は部屋を出ていった
俺はと書つとベッドの上にいた
横にある机の上から手紙を取り出し読み始める
そしてまた

「はあ……」

溜息をつぐのであった

《タク君と私たちの大切な娘へ

君達に3日間の猶予を与えよう。もし下に書いてある約束を必ず守
れるのなら薫は日本に残つてもいいぞ。》

「ここまで読み机の上に戻す

「えいじやつ?」

1人嘆くのであつた

簡単にチャーハンを作つて部屋に持つてきたんだけど……

「寝てる……」

寝息をたてながら拓也は寝ていた
仕方ないので机の上に置く
かわりに手紙を手に取り読み始める

『タク君と私たちの大切な娘へ

君達に3日間の猶予を与えよう。もし下に書いてある約束を必ず守
れるのなら薰は日本に残つてもいいぞ。約束と言つても簡単なこと
だ。2人には「婚約者」になつてもらおうと言つだけのことだ。親
としては娘に幸せになつてもらいたいからね。ハハハ！……3日後
の4時には返事を聞かせてもらつつもりだ。』

「はあ……」

つい溜息をつく
だつてねえ……
いきなり婚約つて……

「じつじょう」

拓也が起きるまで考えふけつていた

「薰……」

「なこ？」

真剣な眼差しでお互いを見合つ
そろそろ答えを出さなくてはいけない
だから答えよつ

「つまいまー。」

そうチャーハンの味について

「よかつた ちなみに醤油ベースのたれで作ったんだよ」

「ハハハ」と微笑む

《ピンポーン》

チャイムの音がした

「誰だるまつへ。」

チラリと時計に目をやる
午後1時ジャスト！

やつたね
じゃなくて……

ケン達の乗った飛行機は飛び立っているから違う

「私見てくれるね」

「ああ。仮をつかるよ」

「はあー」

少し早起きで薫は玄関に向かつた

《ダタダタ…》

え? なんだ?

もの凄い階段を上る音がするんですけど?

《バン!》

もの凄いスピードでドアが開かれた

「お兄ちゃん今日はー。」

「嘘?ー。」

「ここがま

「奈緒?ー。」

なぜこの2人が?

ああ……

また階段を駆け上がる音が……

「ハハハー。2人とも階段を上るときは歩かないと危ないでしょー。」

和子さん……

音からしてアンタも走つてただろ?
まったく説得力ないよ?

「あの～何で～?」

「たたた拓也君?」

えええ?!

今気づいたんですか?!

可哀想だがツシ「ミビ」の満載な人だな……

「はい。でー何で～?」

「実はこの子達がアナタに会いたがつて……迷惑よね」

「そんなことないですよ。俺子供好きなんで」

《トントントン》

今度はゆっくりと歩いて階段を上る音が聞こえた

「燐君と奈緒ちゃん。ジュース持つてきたよ」

オボンにコップと一緒にセタ薰が現れた（昨日の子達+の
ことは話していた）

薰の態度からするとかなりの子供好きなんだと思つた

「和子さんは下でおばさん達が珈琲を入れて待つてますよ」

途端にハツとした顔になる
てゆうか親父達も来たのかよー

「じゃー」の子達には俺達の相手になつてもらこますね

遠回しに『2人はこじで預かります』と言つたつもりなんだけど通じたかな?

「拓也君……ありがとつ。螢と奈緒はこじでおとなしくしてなさい」

「はあー」

元気な返事をする

かわいいな……

とりあえず4人で「一ラを飲む

「君達はこじから家近いの?」

「うん!奈緒とほお隣さんなんだよー。」

元希いっぽいに答えてくれる螢

「へえ……なんか昔の私達みたいだね」

膝の上に乗せてこる奈緒の頭を撫でながら螢はしぐらに微笑みながら言つ
確かに似ている

「生まれた時からお隣さんなんだよー。」

全く同じです

「く、くえ」

さすがに驚いてこるな

『鎌田は奈緒ちゃんが好きなの?..』

「おこおこー。」

何でそんなこと聞くよ?..
まだ小学生だぞ!
しかも低学年だ

「うそ!僕達結婚するんだ!」

『僕たち結婚しよう!..』

なんだ??.

今のは?

鎌田の言つたことと並んでいた記憶が脳裏をよぎつた

『奈緒ちゃんはいいのかな?..』

「うん 結婚する」

『うん 結婚したい』

次に口に薫が言つた言葉よぎつた

....

だが完全には思い出せない

「蟹に奈緒。帰るわよ」

ドアが開くと同時にそつと呼ぶ声がした

「すいませーん。蟹と2人でちょっと話をさせてください。」蟹

名前を呼ぶと蟹は二「ココと微笑み奈緒を連れて部屋から出て行った

「わー…と。蟹、あそこにある鞄持つてきて」

「うん」

立ち上がり指示したとおりに動いてくれた

『ガサガサ』

鞄の中からある物を探す

「あつたあつた」

それは俺の大事なもの
だけど2度と使つことのないものだ

「蟹! れやるよ」

それを差し出す
蟹はそつと手に取る

「リストバンド?」

「そうだ」

そう..

螢に渡したのは赤のリストバンドだ

「実はお兄ちゃんもバスケの選手だつたんだ。そしてこれはお兄ちゃんにバスケを教えてくれた人からもらった大切なものなんだ」

「大切なものの?」

螢の言いたいことはわかる

貰つていいのか疑問に思つてているんだろう

「うん大切なものの。だけど螢にあげたいんだ」

「なんで?」

「螢がバスケを好きだから」

「え?」

そんな理由?とでも言いたそうだつた
でもこれがホントの理由だから仕方がない

「だからそれを着けて上手くなれよ」

笑つた

心から笑った

俺は事故でバスケはできなくなつた
でもだからって螢を恨んでなどいない
俺の足が使えなくなつてまだ未来あるこの子が助かって良かつたの
だと今は心から思つ

「わかつたよ。これ貰うね」

螢は腕につけ一いち方に見せてきた

一之と子供独特の笑いかたをしながら

「ほり、お母さんが待つてるから行きな

「うん！またねお兄ちゃん！..」

『サヨナラ』ではなく『またね』と囁いて螢は出て行つた

「あれ上げたのか？」

声をかけてきたのは親父だった

無音でここまで来るとは…なかなかやるな

「まあね。螢もバスケ好きだつて言つてたから

「やつか……話が変わるが答えは出たか？」

やつぱりその話か…

「そのために今から薰に聞きたいことがあるんだ

「なにをだ？」

「親父に言つたといふで何にもなりと」

事実だ

だから嘘つのや

ストレートに

「教えてようへへ

精神年齢小学生並だな

「こ・や・だ・」

「やんな」と言わす「こ・

クドい

ああ～苛々してきた

《ドカー》

「ほげりー」

奇声を発し親父は死んだ

いや氣絶した

もちろん親父をやつたのは……

「薰ちゃん」と話がしたいんでしょ？父さん連れてくわね

笑顔の母さんだった

だがナイスな行動だよ

引きずられる親父に向かつて手を合わせる
永遠に眠りたまえ……

「南無南無……」

「拓也? 何してるの?」

いつの間にか目の前には薫がいた
ひいてる感じの表情で……

「ああ……なんて言づか……そのお……念佛?」

薫の表情を記号に置き換えると『?』が適切だ

「あのさあ……聞きたい」とがあるんだけど……

「なに?」

「つーん……昔わあ……俺と結婚の約束したか?」

薫の目が大きく開かれる

何か言いたいのかわからないが口がパクパクと動いている

「……したんだろう?」

さらばに追い打ちをかける

「うん……」

認めたか…

「…？」

「覚えてないの？」

「約束したのは辛うじて覚えてるんだが…」

「…いつしたかは全く覚えていない
場所も定かではない

「…思に出したい？」

「ああ」

「仕方ないなあ…話して上げるよ」

「…」
いつて昔話が始まった

第47話（前書き）

なんだこれ（笑）

「薰！」つむりつむり…」

後ろから大声で私を呼ぶ声がしたので振り返る
そこには私が好きな人が笑顔で手招きしていた

「写真撮るよ！早くきなよ！…」

隣にはずっと一緒に過ごしてきた友人もいる

「今行く…」

駆け足で2人のもとへ行く

「母さん。みんな揃つたよ」

「はいはい じゃ撮るわよ」

さつきまで卒業するのが悲しくて泣いていたのが嘘のような眩しい
笑顔を3人がカメラに向けられる

『カシヤ』

「はい。次は2人づつ」

タクちゃんのお母さんの指示により2人づつで写真に写る
最初にタクちゃんとケンちゃんで次に私とケンちゃん
最後に私とタクちゃん

「笑つて笑つて」

タクちやんはいきなり手を私の肩にまわした

《カシヤ》

「薰ちゃんの薰真つ赤になつてゐるわ」

だつて好きな人にいきなり肩に手を回されたら……ねえ?

「薰」

聞き慣れた声がした

「ママ……」

「わかつてゐるわね?」

「うん……」

一気に私のテンションはがた落ちした

ママは最後に「6時までよ?」とだけ言い残して先に帰つて行つた

「薰?」

「え?あ…な?」

タクちやんはジッと私の顔を見てきた

「元気ないな……」

「だつてあと5時間したら遠いところ引っ越すんだよ？嫌だよ……」

「僕も嫌だな……」

（この頃拓也は自分のこと『俺』ではなく『僕』と呼んでいたのです！ B Y 薫）

「タク！ 薫！ 公園に行くよ！ 」

遠くからケンちゃんが私たちを呼ぶ

「行つてらつしゃーい 」

おばさんに見送られながら私たちはいつも遊んでいる公園を目指した
公園に着くと昨日用意していたシャベルを使って桜の木の前に穴を
掘り始めた

掘り始めて2分過ぎた頃私達はある過ちに気がつく

「こつたん帰らないと手紙ないじやん！ 」

タクちゃんの叫び声が公園に響きわたった

ああ……小さな子がタクちゃんを変な物を見るような目で見ている

「私も……ない」

「入れ物もないしね」

なぜかケンちゃんは余裕だつた

「僕はまだ掘つてるから2人とも一回家に帰つてまた来なよ。2人が帰つて来たら僕も手紙取りに帰るから」

「わかつた。よし走るぞ！」

「うん！」

後ろから

「入れ物忘れないでね！」と聞こえた

公園から家までは走れば5分くらいで着く
そして私達は5分でついたのだが……

「ぜえぜえ……1分ゲホ！以内に……ね

「おう……」

私は息が上がりまくつて苦しかつた
タクちゃんはバスケをしているからか分からぬがあまり息が上がり
つていなかつた

1分後

見事合流し、また5分かけて走るのであつた

「ぜえぜえ……げほげほ！」

喋れない域まで達してしまいました

「おいおい…大丈夫か?」

私はただただ首を縦に振るしか答えるすべがなかつた

「じゃ～僕は行くね

走つてケンちゃんは公園を出て行つた

「じゃ～穴掘り……マジ?」

タクちゃんは驚きのあまり顔がヒキツつている
何に驚いているか分からなかつたがすぐに分かつた

「2メートルは軽くいってるね」

ケンちゃんは1人で穴を掘り終えていたのだ

「ちょっと待ったーー！」

俺の叫び声により薰による昔話が中断される

「ビビりじたの？」

「全て思い出したんだよ」

薰は嬉しさと恥ずかしさが混じり合った表情をしている

「ホントに？！」

「ホントだ」

「よかつたな薰」

「「「...」」

.....なぜに？

「パパ？！」

「さうだが？何か問題でも？」
大有りだ！

「鍵してありましたよね？」

『やつやつて侵入してきたんだよー』

「ふ…私に不可能はないのだよ」

言つてる意味が分かりませんから
だいたいいつから居た?

「だいたい何で茂さんが喜んでいるんですか?」

「その話は薫がずっと私にしていてね…実を言つと3日間の猶予は
タク君に薫との約束を思い出してもらうためのものだつたんだよ」

今サラリととんでもない」と言つたよね?
自覚してんのか?

「何で俺が約束を忘れてること知つてるんですか?」

まさか家に盗聴してはいらないだろうな?
いや……この親バカならありえる

「タク君が事故に遭うだいぶ前に電話で薫から言われたんだよ。『タ
クちゃん昔した約束忘れてるみたいなの』ってね。だいたい君の御
両親が私のところに来たのは私が約束の話と薫の話をして君に約束
を思い出すようしむけるために許可をもらつためだつたんだよ」

次々と告げられる真実にただ黙ることしかできずにいた

「あと婚約の許可もね」

婚約の話がついでになつてくる」と言ひまないでおり

「君達にあと2日猶予を『えよ』。だから……」

さつきまでとは打つて変わって優しい笑顔をこびりと向けてくる

「帰つてあの公園に行つてきなさい。そして君達で自分達の答えを出しなさい。ただ公園で答えを出すのではなく真田病院で答えを出したなさい」

最後には普通の顔に戻つていた
てゆうかなぜ真田病院でなわけですか？

「わかりました。明日帰つてすぐ」 「明日? なにを言つてるんだね君は。今からに決まつているだろう!」

アンタこそ何言つてるんだよ……

チケットがないから帰れ……なんですかその長細い形の紙は

「……にチケットがある」

なぜ6枚？

「タク君の御両親と早紀はすでに下で待つてゐる。2人とも急ぎなさい」

「だから叔父さんたちステッケース持つてたんだ……」

「もつと早く疑問に思えよ!」
とツツコミを入れつつバックをもつ

「私が持とつ

やはりこりこり優しことこりは昔と変わっていなかつた
だから昔みたいに……

「ありがとうござります」

「君のその笑顔久しぶりにみたよ

笑えた

『ザツザツ』

土を掘る音だけが公園に響いていた
目の前ではケンがひたすら穴を掘っていた

「でもビックリしたよ。いきなり帰ってきたかと思えば穴を掘つて
ほしいなんて」

作業をしながら顔をこじらに向けてきた

「仕方ないだろ？俺はこんな状態なんだし」

そう……

俺は車椅子に乗っていた
単純に立つて歩くことができないからだ

「まあ……その状態が嘘のよつて完璧に治る方法があるけどね」
そう言つたケンはどこか遠くを見るような悲しい眼をしていた

「それってど」「ジュース買つてきたよ」

ケンへの問いかけは薰の元気な声によつてかき消された
もう聞く気も失せたので聞かなかつた

『ガツ！』

シャベルが何か堅いものに当たつた

ケンは器用に当たつたものの周りだけを堀り、取り出した

「これって……」

「そういえばケンにこのカンカンのこと言つてなかつたな

「はい」

「え?」

「タクが開けなよ。これの発案者なんだから」

「一二二」と微笑みながらカンカンを手渡していく
そつと手に取り、開け……

開け……

……

開かない

「ふんがあーー！」

指に思いつきり力を入れ蓋を引っ張る

『ガパン!』

「御対面だね」

開いた!

薫は無理して笑顔を作っていた

そのことはケンも気づいたみたいがあえて言わなかつたようだつた

3人とも昔自分が大切にしていた物と将来の夢を書いた紙を手に取り読み始める

「僕は医者になるつて書いてあつたよ」

アハハと笑うケンからも無理していると感じられた
薫はこのあと答えを出さないといけないから無理して笑うのはわかる
だがケンが無理することが理解できず腑に落ちなかつた
それにさつきの言葉も気になつた

「本当は知つてゐるんだ…全て。茂さんと親父から話を聞いてるんだ。
婚約のことも…これから病院に行つて起じる」とも……」

「これから起じる」と?

薫が呟く

なんだよ……

これから起きることつて

「病院へ行こう。やうすればわかることだから」

ケンに押されながら公園をあとにした
気がつけば病院についていた

「タク…薫……」

「何？」

「僕はタクと薫がこれから出す答えには何も言わない。ただ後悔はないでね」

再び押し始め、みんなが待つであろう診断室に入った
入ると案の定、俺の両親と薫の両親とケンの親父が居た

「さて答えを」

「はい」

俺は薫に視線移しまた茂さんに向ける
目を瞑り薫が話した昔話の続きを思い出す

「先に入れておこうよ」

「薫はなぜか拳動不審だつた

「そうだな…入れとくか」

互いに大事なもの（僕は空気の抜けたバスケットボールで薫は去年
に撮影した3人で写った写真）を入れ、最後に手紙を入れた
将来の夢を書いた紙をそれぞれ入れようとした時だった

『ブア！』

勢いのある風が吹いた

と同時に

「あー。」

薫が手に持っていた紙が飛ばされた
なぜか薫は固まっていた

仕方なく地面に落ちた紙を僕が拾いに行く羽目になつた
拾つたさいに偶々……

偶然に……

薫の書いた将来の夢が見えてしました

「…………。」

「タクち……見ちゃだめええええ……！」

叫びながら僕の手から紙を奪い返すがもう遅い
しつかりと見てしまったから

「…………見た？」

涙目になりながら言つて薫に焦つてしまつて素直に首を縦に振る

「どう…思つた？」

「どうつて言われてき……」

紙にはこう書いてあった

『タクちゃんのお嫁さんになること』

「僕等まだ結婚できないよ？」

「知ってるよ」

とつとつと薰は座り込んで顔を俯けた

「18歳にならないと結婚できないんだよ?」

「やうなの?」

本当に驚いたのだろう

薰はすごい勢いで顔を上げてきた

「やつだよ」.....。

沈黙

「.....」

『『ケン(ちやん)早く帰つてきて(くれ)』』

心の中で神に...じゃなくてケンに祈る

だいたい僕はどうすればいい?

別に薰は嫌いじゃない

だからと言つて結婚したいわけでもない

「僕まだ薰と結婚したいかわからない

だから...」は正直に素直な気持ちを言つてみよつ

だつて...」で言わないともう言つチャンスがないかもしれないから

……

「だから薫がまた」こっちに帰ってきた時に僕が18歳で薫のことが好きだつたら……」

少し言つたがそんな事言つてられない時間がないから……

「僕たち結婚しよう!」

言わされたことがわからないのか薫はポカンとしていた

「か薰?」

「へ?」なんとも間抜けな返事だ

「結婚……」

「うん したい」

小指を立てる

「指きり

「なんで?」

「約束だから

小学生のくせに溜息をつく

でも結局は小指を立て薫の小指と絡める

「 指切りげんまん

」

指切つたと言づと同時に指を離す

「 終わつた? なら僕も紙とオカリナ入れるね」

いつから戻つていたのですか健太さん? !
しかもオカリナ入れるのかよ? !

「 ほら埋めちゃおうよ」この後のことはあまり覚えていない
ブラン口で遊んだ気もする.....だがハツキリと思い出せない
唯一ハツキリと覚えているのは薰を見送る時に3人で泣いたことだ

田を開き、茂さんの眼をまつすぐ見る

「俺は薰を愛します」

「それで?」

茂さんも田を逸りわずか俺の田をまつすぐに見てくる

「こすれ……薰と結婚させてください」

車椅子の上ではあるけれど頭を下げる

「ダメ」

……
ま?

聞き間違いだよな?

うんそうに決まってる

「薰と結婚させてください」

「だからダメ」

「…………。」

空気が凍つた

ところより皆が固まつた

数十秒たつた

とととにかく理由を聞こう

「何ですか？」

「薰のこたえを聞いてないから」

「へ？ 私？」

何その理由は

「薰はどうしたいんだ？」

「私も拓也と結婚したい」

「じゃあタク君のくだ」

おいおい

なんか……あつさつとしそぎているぞー！

「よかつたわね2人とも」

そして早紀さんは他人事だし……

「では次は私の出番だね」

久々にケンの親父登場
いつぶりだらう?

「まず…拓也君の足の話なんだが…… 1つ質問するがもし手術で完全に、もちろんリハビリを含めてだが治ると言われたりどうしたい?」

足が完全に治る?

つてことは……

また走れる?

また飛べる?

また…バスケができる?

だつたら……

「手術を受けます」

「それが北海道でも…かい?」

「それって……」

薰が言いたいことはわかる

『それはどうこうこと?』だ

「北海道に私の知り合いで世界でも有名な技術を持つ医師がいるんだ。ただ彼は有名なあまり忙しくてね……北海道のS市にある病院から離れられないんだ。ただ向こうにいるかぎり彼の治療を受けら

れる

「期間はどのくらいかかるんですか？」

「短くても2年間だよ。その間向こうに住んでしまうことになる

2年？

短くても？

「向こうには運のいいことに君達の通う学校の姉妹校があるし、火野さんと言つ方が面倒を見てくれてもいいと言つてくれている

「でもそれじゃあ……」

「薫と離ればなれになってしまつ

俺は薫がアメリカに茂さんと早紀さんと行くことに反対した
なのに俺が北海道？

そんなことできない

「わかったかな？何で私が真田病院でこたえをだせと言つたか。
確かに私は君達が婚約をすれば薫を日本にこしてもらいたいと言つた。
あとは自分達で決めなさい」

「俺は……俺はこの町に残ります

「走れないからなんだ？
飛べないからなんだ？
バスケが……」

「私はこの町に残つて拓也を待つから

薰の発言に驚いた

顔を横に向けると薰と眼があった

薰の眼からは覚悟を決めたことがわかる
でも……

「俺は薰とずっと一緒に居たいから婚約したんだ。それにここでリハビリをすれば歩けるんだから」

「ダメ！ 北海道に行って手術を受けてきて」

「でも……お前はずっと俺の帰りを待つのか？ 待ち続けるのか？」

「待つよ。拓也を愛してるから……私は夢を叶えてもらいたいの」

俺は驚きのあまり声を出せなかつた

「その紙に書いてある拓也の夢を叶えてもらいたい！」

俺の手にはさつき掘り返したカンカンに入っていた紙がある

薰は知っていたんだ

これに書いてあることを……

「薰帰るわよ！」

瞳の機嫌がいいことが声でわかつた
と言つより朝からハイテンションだった
何か良いことでもあつたのかな?
例えば朝茶柱が立つてたとか……
ないね

「どど堂本先輩！」

教室のドア付近から私を呼ぶ声がした
目をやると男子にしては背の低い可愛らしい顔の子がいた
夏服の襟の刺繡された緑色のラインから2年生だとわかつた

「薰なら彼氏がいる。帰りな」

元希の口から絶対零度の言葉が発せられる

「……」

男子生徒は肩を落とし帰つて行つた

「何のようだつたなんだろ?とか思つてるんじょ?！」

後ろから私に飛びついてきた桜は元希から影響を受けたのか人の心
を読めるようになつっていた

「まあ……ね」

「薰……あの子は告白しに来たんだよ。それを元希が追い返したんだよ」

「おい健太……言い方が気にくわん」

「さあ皆帰らうか?」

ケン（呼び方変えたんだ）は元希の声をスルーした

「健太」

「はいはい」

ケンは瞳に手を差し伸べ瞳はその手を握り歩き始めた

「ほい」

「えへ」

元希と桜もケン達同様に歩き出す

『いいなあ……』

心の中でそう呟いた

今私に手を差し伸べてくれる人はいない

1年半前は彼ら同様に私の愛する人が笑顔で手を差し伸べてくれた
そのことを思い出すと少し寂しい……

ダメダメ！

寂しがらないうつて決めたんだから！

彼等を追いドアから廊下に出ると蒸し暑かつた

「暑いなあ……」

高校3年生の私達のところ……

「薰早くー・ダッショーー！」

もつすべ……

「待つてよお

夏は訪れようとしていた

「みんなー！そつちは正門じゃなーよー！」

暑さにやられたのかな？

みんなが歩いてる方向は正門とは真逆の方向だった
よつするに裏門に向かつてた

「いいから付いて来て！」

瞳に睨まれる

「……はー」

もちろんこれしか言えませんから（泣）

裏門につくと前に見たことのある長ああああい白い車があった

「さあ乗って乗って。時間が押してるから」

『どうこう意味だらひへ。』と思いつつコマジンに乗り込み瞳の横に
腰を下ろす

「出して」

瞳の印図とともに発車した

皆それぞれパートナーと楽しそうに話していたため私は外の景色を
楽しむことにした

空は青くその所々に白い小さな雲が漂っていた
空を眺め始めて20分も経つとさすがに飽きた

私は鞄の中から一枚の手紙と少し一枚の古い紙を取り出し古い紙
に書いてあるコトを読む読み始めた

『将来の夢はプロのバスケ選手になる』

これを見る度に彼を送り出したあの日を思い出す

次に手紙を読み返すのは「これで7回目だ

『薰..もちろん元気にしてるよな?俺は佐々木先生が驚くような早
さで回復中だ。いつも学校の連中ともなんとか仲良くやつていけ
てる。だけど時々無性に薰に会いたくなる.....会つてこの手で思い
つきり抱きしめたいという衝動に駆られるんだ。だから薰と再会し
た時は思いつきり抱きしめるから覚悟しとけよ?』

読み終え顔を上げるとみんなが私を見ていた

「そそいえば今どこに向かっているの?」

手紙の内容は皆知っている.....『『『正させてください
勝手に瞳が見てみんなにバラしました
だから恥ずかしいので話題を手紙にもつていかれないようにじつ
と焦つているのです

「薰だけは秘密」

瞳.....

暗に私以外みんな知つてると言いたいんでしょ?
なんか虚しい.....

「じゃ良こ」と教えてあげる

「え?」

落ち込む私に瞳は優しく微笑む

「薫に見せたいものがあるの」
その発言と同時にリムジンは止まった

「あーお姉ちゃんだ」

「え？」

リムジンを降りるともの凄いスピード正面から私に抱きついてくる女の子がいた

「えへへ」

「えつ……と」

誰？

可愛らしこ笑顔をじりじりと向かって来るのを……
見たことがあるような……
な……

「お姉ちゃん？」と「あはー」

前方から今度は男の子が…………誰だっけ？
誰か教えてえええーー！

「薰ちゃん久しふりね」

「和子さん？…ついて」とはーーー。」

「あら？…もしかして分からなかつたの？」「

ふふふと笑う和子さんは男の子の腕をとつて「あら見せてきた
手首には小学生にはちょっと大きめの赤のリストバンドがしてある

「薫と奈緒ちゃん？」

「「うんー。」」

元気いっぽいの2人

たつた1年半でこんなに大きくなるとは……
驚きです

「お姉ちゃんに行ひー。」

奈緒ちゃんはグイグイと私の手を引っ張る

「え？…あ…ちよつとー・ビー」と「。」

小学生相手に動搖する私つて……

ダメだね……

「いいからいいから」

「私たちも行くからって……時間……」

私以外みんなハツ！とした表情になる
私は腕時計に目をやる

午後3時すぎ

「健太＆元希！」

「「承知！」」

「「へ？」」

健太と元希はそれぞれ奈緒ちゃんと螢君を肩に抱え走り出した
螢君は若干嫌ががっている

「ほら薰も走るー！」

桜に背中をたたかれ私も走り出した

建物中に入ると歓声やら太鼓の音やら沢山の音が聞こえてきた
階段を走つて登りドアを勢いよく小学生を抱えた2人が開く

下ではバスケの試合が行われていた

「見せたいものついてコレの」と…

私の問いに瞳達は笑顔で頷く

「インターハイ2回戦だよん」

瞳の声の後に

『ナツン!』

といひ、湯しき音なし

さつき机に置いた音ともは消え一瞬で青筋が急にたたか
そんな中……

片手でぶら下がつていた

敵も味方も駆逐も感心としていた

ブ

試合終了のブザーだろうか？

男はリングから手を離してこちらに背を向けたまま着地する
私はその男の後ろ姿に見覚えがあつた
右膝にはサポートーターがしている

《ワーラント》

《π, π', π'', π'''》

再びいろんなものの入り混じった音がが出始める
と同時に

「お姉ちゃん？！」

後ろから奈緒ちゃんの私を呼ぶ声がした
私は走って階段を降りコートを目指した

「あ……」

私は瞳の言つ『見せたいもの』の意味が今になつて理解できた
コート内で走り回りバスを受けシユートを決めている背番号18の男

『ブー！』

機械のブザーの音がして次に審判がの笛の音がした
選手全員が整列をして例をする
今度こそ試合が終わつたのだ
ドアの横で私は待つことにした

なんて声をかければいい？などと考えながら

1人……

また1人とドアから人が出てきた
そして……

「あ……」

1人の男が目の前で立ち止まつた
右膝にはサポーター……

背番号18……

急に視界がボヤケた

「泣くなよ」

彼は困ったような笑顔で私の頭を優しく撫でる

「だつ……て……」

「薰……」

「な……に?」

頑張って泣くのを止め返事をする

「ただいま」

その一言で私は完璧に泣き止み笑顔になる
そつ……

ずっとコレを言える口を待ち望んでいた

「お帰り拓也ー！」

最終話（前編）

今までお世話をありがとうございました。……ありがとうございました（トントン）

薰を後ろから抱きしめてから何分経ったんだろう?
わからない……

だけど幸せだ

ふと薰の胸元に手をやるとハート型のネックレスが、指に手をやると前にプレゼントした指輪とは違つシルバーの指輪がしてあった
次に自分自身の指に手をやる

薰と同じ指輪がある

「ちよっとー何時までそつしてこらもつー。」

おっと

閻魔大王の、」登場だ
まあ此処教室だしね（笑）

「雪が降つておもつなんだから早く帰るわよ

「「はあー」」

『僕たち幸せです』オーラ出しまくんですけど何か問題でも?

「拓也」

微笑む薰に手を差し伸べる

「えへへ」

ぎゅっと握つて歩き出す

握る度に黙つてしまつもつ寂しげに思ひはせないと

「俺からこの1年半の寂しがつたことの一つにコレが入っていたからなんんだけどね……」

俺がこの町に帰つてきて5ヶ月経つた
インターハイは3回戦敗退で終わつてしまつた
そして引退が決まつてすぐにこつちに帰つてきたのだ

古くも新しくもないアパートのある部屋の前で立ち止まりポケットから鍵を出し扉を開ける

「「ただいま」「

返事はない

当然だ

ここは俺と薫の家なのだから
家に入リストーブのスイッチをオンにする

「薫……」

「なあに?」

今度は正面から抱きしめキスをする

「俺すげえ幸せ」

「私も」

俺はまだ生まれてきて18年だ
でも残りの人生を共に過ごす愛する人が側にいる

幸せだ

大切な人達が俺と薰の結婚を心から喜び祝ってくれた

幸せだ

薰と手をつなぐこと

薰と話すこと

抱きしめること

その一つ一つが幸せだ

だから心からこう想い、言葉にできるんだ

「愛してる」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8545c/>

RAN&JUMP

2010年10月9日03時00分発行